

No. 078

コスタリカ国  
農業開発協力基礎一次調査  
報告書

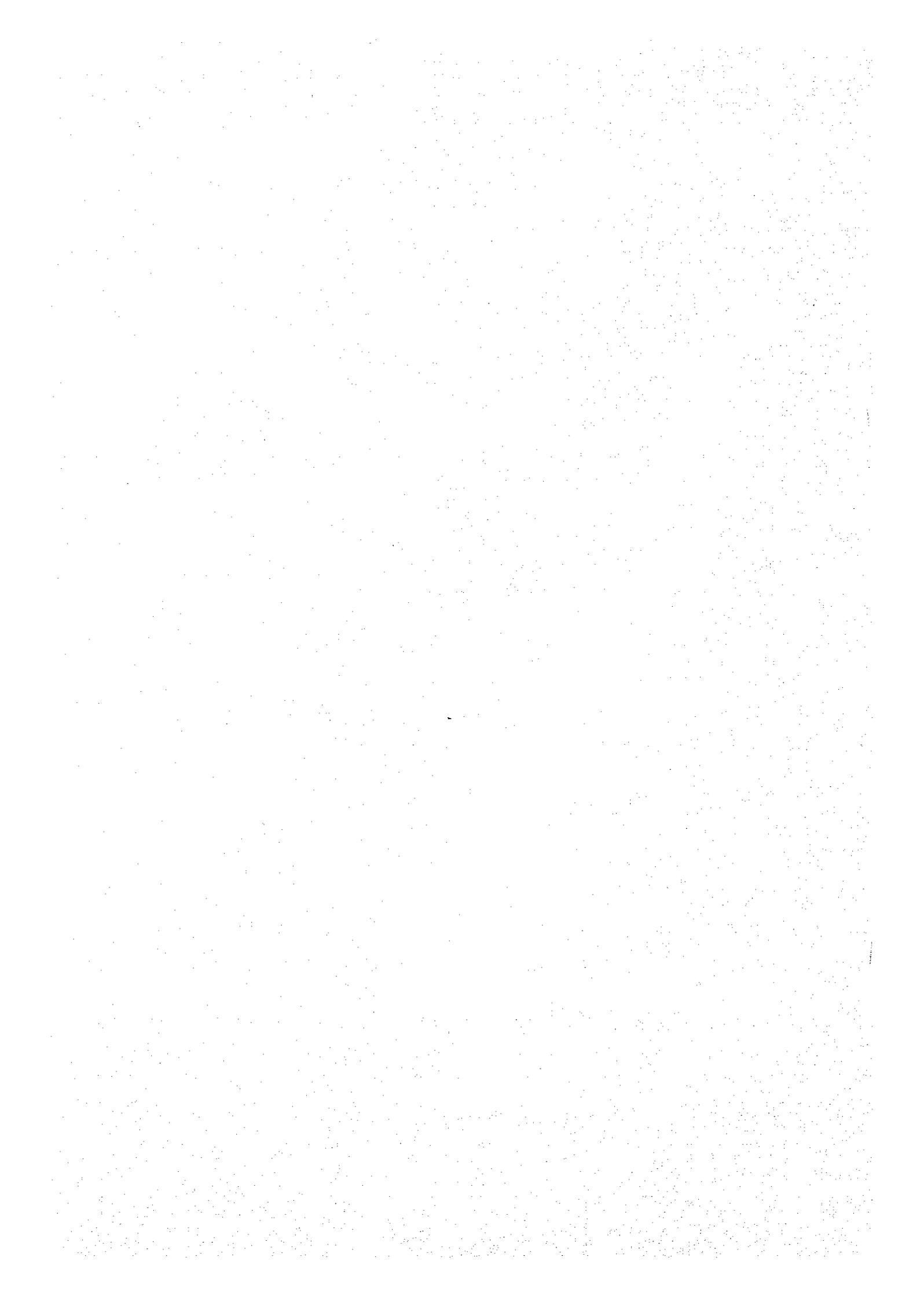
昭和61年1月

国際協力事業団

農計技

J R

85 62



コスタリカ国  
農業開発協力基礎一次調査  
報告書

JICA LIBRARY



1020242C2J

昭和61年1月

国際協力事業団

国際協力事業団

受入 月日	'86. 8. 20	605
登録 No.	15179	84.2
		AFT

## はじめに

コスタリカ国は、他の中米諸国に比して、教育水準は高く、政治的にも安定している。

しかしながら、同国の国際収支は、他の中南米諸国と同様悪化の傾向が見られ、近年、同国では外貨獲得を目指し、農業面でも積極的に輸出産業の奨励策がとられている。

コスタリカ国は、自然的条件に恵まれ、主に熱帯果樹を産している国であるが、今後新品種の導入、あるいは農業適地の開発など農業開発に、大きな可能性を有している国である。

このような状況のもとで、本邦企業から同国における果樹及び胡麻の試験的事業について調査の要請があった。

当事業団は、これら企業の同国における、主として果樹及びごまの栽培事業実施の可能性について調査するため、本橋馨氏（（社）海外農業開発協会理事）を団長とする調査団を派遣した。

同調査結果に基づき本報告書を取纏めたが、本報告書が今後我が国の民間企業等が同国において農業開発、開発輸出に参画する際、役立つことを願うものである。

ここに、調査の実施にあたり、多大の御協力いただいたコスタリカ国政府機関、同国大学研究所の関係者、在コスタリカ日本大使館、外務省、農林水産省の関係各位に対し深く感謝の意を表する次第である。

昭和61年1月

国際協力事業団

理事 山 極 榮 司

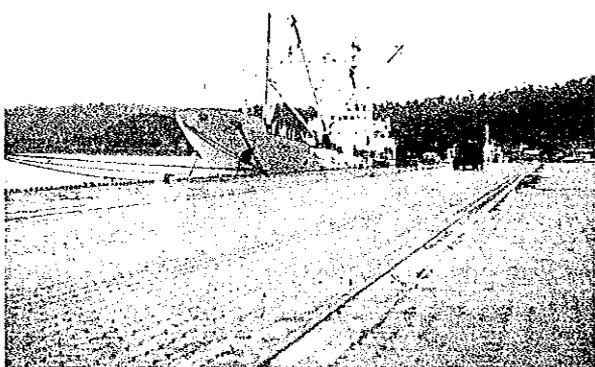




エンリケヒメネス試験場（調査団員他）



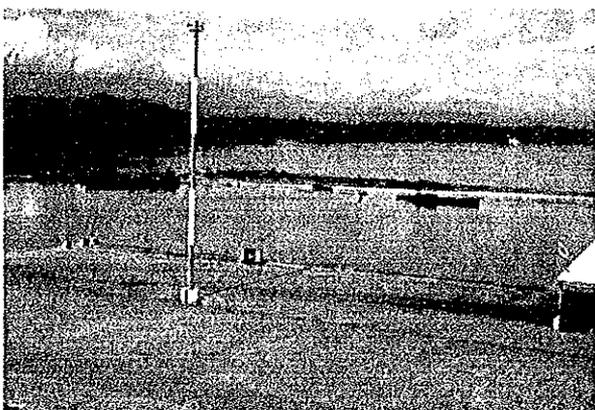
アスパナ農場



カルデラ港



カルデラ港周辺



リモン港



リモン港





Cartago 農場



農場におけるゴマの試作栽培



Guana caste の大豆栽培  
コスタリカ農牧省試験場



Guana caste 地域のソルゴム栽培  
コスタリカ農牧省試験場



Guapiles 地域

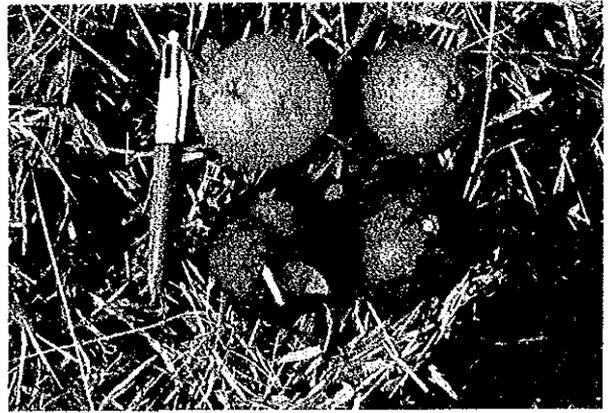


Alajuela 地域

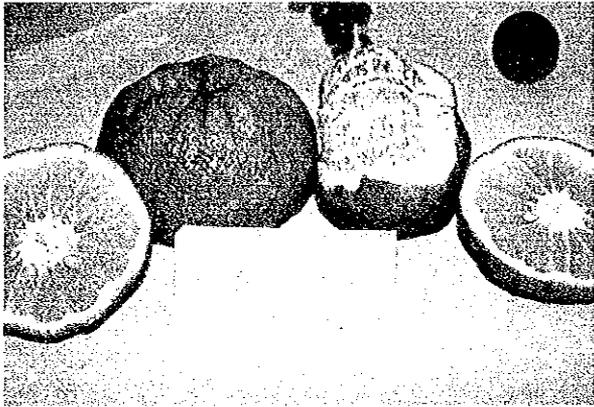




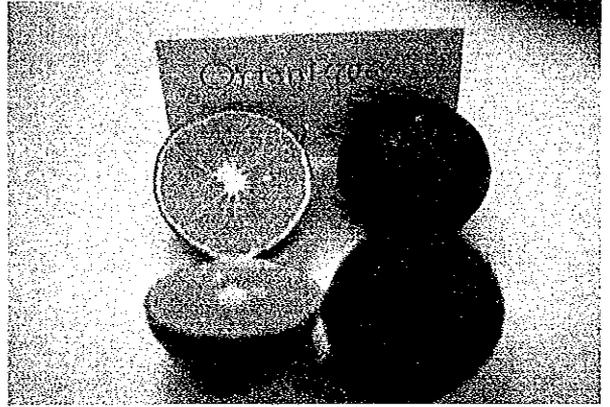
定植後3年生のアグリフルーツ



未熟アグリフルーツ(緑色)  
オルタニケ(黄色)



アグリフルーツの果実



オルタニケの果実



バニラの花とさや

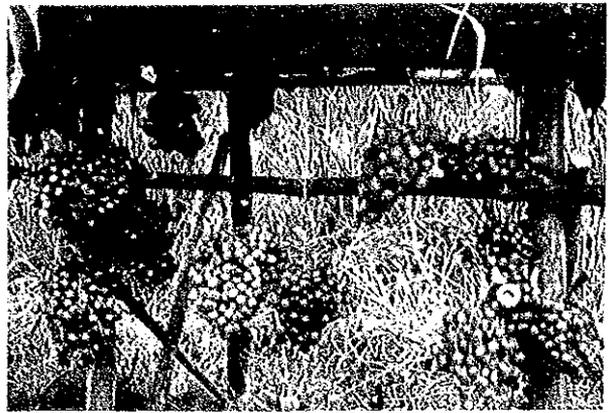


オールスパイス





ベヒバジェの木



ベヒバジェの果実



未熟トゲバンレインの果実



アレカヤシの実 (ピンロウジ)



ホコテの果実



ニクズクの実



# 目 次

はじめに

事業関連写真

I 調査の概要	1
1. 調査の背景・経緯と目的	1
2. 調査団の構成	1
3. 調査日程と調査行程図	1
4. 訪問機関・面会者	3
5. 調査団行程図と調査要図	5
6. 調査の概要と総合所見	6
II コスタリカの一般情勢	11
1. 一般概況	11
(1) 国土・自然環境	11
(2) 政治・社会	11
(3) 経済, 国際収支	14
2. 農業の動向	18
(1) 経済全体に占める農業の役割	18
(2) 主要農産物の生産動向	19
(3) 基礎穀物の生産奨励策	19
(4) 伝統輸出産品の最近の動向	23
(5) 農業問題の現状	25
3. 経済政策, 外資制度等	26
(1) 経済政策目標	26
(2) 輸出促進政策	28
(3) 通貨, 為替, 外資制度等	29
(4) 労働事情	31
III 世界のゴマ事情及び熱帯果実事情	33
1. ゴマの生産, 貿易の推移及び日本の輸入状況	33
2. 主要熱帯果実の生産及び日本の輸入状況	38

Ⅳ 農作物生産の現状とゴマ栽培の開発の検討	46
1. 栽培環境	46
2. 新大陸起源の農作物	49
3. 主要農作物の栽培事情	50
(1) 太平洋側北部	57
(2) 太平洋側南部	57
(3) 中央高地	57
(4) カリブ海側	58
4. ゴマ栽培について	58
(1) 中央・南アメリカのゴマ生産	58
(2) コスタリカにおけるゴマ生産	60
(3) ゴマ栽培の根拠と利点	61
(4) 試作計画(案)	77
5. ゴマ栽培開発協力(試験的事業)の可能性と留意点	89
6. 参考文献	89
Ⅴ 熱帯果樹等栽培の現状とそれらに関する開発の検討	91
1. 主要熱帯果樹及び永年作物の栽培の現状	91
(1) 果樹及び永年作物の種類	91
(2) 主要果樹栽培の現状	92
2. 開発候補作目とその現状	94
(1) アグリフルーツ, オルタニケ	95
(2) バニラ	96
3. 開発候補地の栽培環境	97
4. 栽培試験項目及び技術上の改善すべき点	99
5. 果樹栽培開発協力(試験的事業)の可能性と留意点	101
〔付録〕 メキシコ C I A P Y の機構と活動	108
(巻末資料)	123
1. 1983年農業促進法(訳文及びスペイン語)	
2. カリブ海特惠関税システムガイド(英文)	
3. フリーゾーンガイド(英文)	

4. 輸出及び投資の促進プログラムガイド(英文)
5. 1981年改正輸出促進法(英文)
6. コスタリカの地図・年平均降水量図



# I 調査の概要

## 1. 調査の背景・経緯と目的

コスタリカ国は、恒常的な債務累積問題をかかえており、一人当たりの対外債務額も世界第五位という赤字国である。その一因として、この国の主要な外貨獲得手段であるバナナ、コーヒー、砂糖等の輸出の低迷ないし減少が考えられる。コスタリカ国政府としては、1982年より国家開発計画を進めており、「土に返ろう」をモットーとして農業開発、特に輸出用農産加工業の振興を含め、前記輸出産品に代わる農産物を模索中である。

我国との関係では、円借款による太平洋岸港湾建設などの経済・技術協力が行なわれているが貿易部門においては日本の大巾輸出超過となっている。

このような状況下で、現地の本邦法人の中には現地での「輸出産品」の開発に投資意欲を示している向きもみられる。このため、現地等での輸出関心産品を中心としつつ、コスタリカにおける農業の一般事情、投資環境等の調査を通じ、本邦法人の投資の可能性、開発協力効果等の検討を目的とした「基礎一次調査団」の派遣となった。

## 2. 調査団の構成

団長・総括	本橋 馨	(社)海外農業開発協会理事
団員・協力企画	山本 憲孝	農林水産省経済局国際部国際協力課海外技術協力官
〃・畑作物(ゴマ)	小林 貞作	富山大学教授理学博士
〃・果樹栽培	小寺 義郎	国際協力事業団特別囑託
〃・業務調整	三沢 吉孝	国際協力事業団農林水産計画調査部農林水産技術課

## 3. 調査日程

日順	月 日	行程及び訪問機関	滞 在 地
1	9月 4日(水)	(17:20)JL062 (11:05) 東京 → ロスアンジェルズ	サンホセ
2	5日(木)	(01:00) MX111 (10:45) ロスアンジェルズ → サンホセ	
3	6日(金)	(PM) 大使館表敬, 打合せ (AM) 現地企業関連農場, 候補地調査(アラフエラ) 周辺農民からのヒアリング (PM) 農牧省次官表敬, 意見交換	〃
4	7日(土)	(AM, PM) 市場調査(メルカード(市場), マスプロメダス(スーパー), バリ(スーパー), ヤオハン(スーパー))	

日順	月 日	行程及び訪問機関	滞 在 地
5	8日(日)	(AM) サンホセ→エスバルサ→プンタレナス→エスバルサの 「コマ栽培」の3候補地調査 (PM) プンタレナス→カーニヤス	カーニヤス
6	9日(月)	(AM) エンリケヒメネス試験場 (PM) カーニヤス→プンタレナス(カルデラ港)→サンホセ	サンホセ
7	10日(火)	(AM) コスタリカ大学農学部, 付属農場 (PM) ① CINDE, ② 「L&S」本社	〃
8	11日(水)	(AM) CATIE (PM) ASBANA農場	リモン
9	12日(木)	(AM) リモン港(バナナ積出港)L&S社のバルキリア 農場 (PM) 移動	サンホセ
10	13日(金)	(AM) ①「L&S」社のアラフエラ農場, ②麗沢農場 (PM) 経済(商業)省, 大使館への概況報告	〃
11	14日(土)	(AM) サンホセ近郊農業地帯 (PM) 団員ミーティング	〃
12	15日(日)	①山岳農業地帯調査 ②資料整理	
13	16日(月)	(11:10) MX908 (14:45) サンホセ → メキシコシティ (18:55) MX603 (20:25) メキシコシティ → メリダ	メリダ
14	17日(火)	(AM) CIAPY(MOCOCHA) (PM) CIAPY(UXMAL)	
15	18日(水)	(10:25) MX604 (11:55) (AM) メリダ → メキシコシティ (PM) 資料整理	メキシコシティ
16	19日(木)	(11:55) JL011 メキシコシティ →	
17	20日(金)	(19:15) 東京	

CINDE: COALICION COSTARRICENSE DE INICIATIVAS DE  
DESARROLLO (コスタリカ開発促進連盟)

L&S: LACHENR & SAENZ (ラクネルサイエンス社)

CATIE: CENTRO AGRONOMOICO TROPICAL DE INVESTIGACION Y  
ENSEÑANZA (熱帯農業研究研修センター)

ASBANA: ASOCIACION BANANERA NACIONAL (国内バナナ生産者組合)

CIAPY: CENTRO DE INVESTIGACIONES AGRICOLAS DE LA  
PENINSVLA DE YUCATAN( コカタン半島農業研究センター )

4. 訪問機関および面会者

(1) 農 牧 省

Oscal Fonseca : 次官

(2) エンリケヒメネス試験場

Sirnorudo Do Blis Gsetirrio : Ingeniero

Entomdogio : Tecnico

Gandul : Tecnico

(3) コスタリカ大学農学部

Guillermo Sancho : Programa Investigacion Prutales de Altura

Campo Oceampo : "

Ramon Ennandes : "

Herme Matamore : "

Rodolfo Araya : Programa Investigacion Leguminosas de Grano

(4) CINDE

Engemo Pognataro-Pacheco : Director Private Sector

Danilo León : Asistente de Gerencia

(5) CATIE

Julio D Salazar : Fitomejorador

Romeo Martinez Rodas : Jefe Departamento de Produccion Vegetal

Arnaldo E Chibbara : Jefe de Cooperación Técnica y Financiera  
Externa

(6) ASBANA農場

Juan R Lang Q : Dirección de Agricu Hura

Roberto Ruiz Barrantes : Zootecnista - Acuacultor

Earl Junier Wade : Zootecmicta - Cocodrilo

Maua' Esther Molina Auas : Especialista de Frutas

(7) 経済(商業)省

Arturo González González : Director General Comercio Interior

(8) L & S

Guillermo Lachner : Vicepresidente

Manuel Santos : Director de Mercado

Rolando Barrientos s : Gerente Division Forestal

Pedro Yglesias D : Gerente Dirision Agricola

Manuel Lachner V : Vice Psesident

(9) 紀文農場周辺農家

Rafael Sanabria

Rafael Angel Porun

(10) 候補地周辺農家

Sergio Lunigo Oguilow

Rodrigo Castillo

Almacen Rudin

(11) CIAPY

José Luis Ramírez Choza : Coordinador Regional

Salente Menelg Gallegos : Especialista

Juan Jasso Argunedo : "

Carlos Rivero : "

Guillro Vgeulor Castillo : "

J. Gabuef Lais Delgado : "

Dario Reyes Guerreo : "

(12) 日本大使館

江藤之久 : 大使

飯島 清 : 書記官

石川輝行 : 理事官

鮎川紀行 : 大使館員

(13) 現地企業協力者

桑田 久 : (株)紀文国際事業管理室室長

大場政則 : (株)紀文国際事業管理室

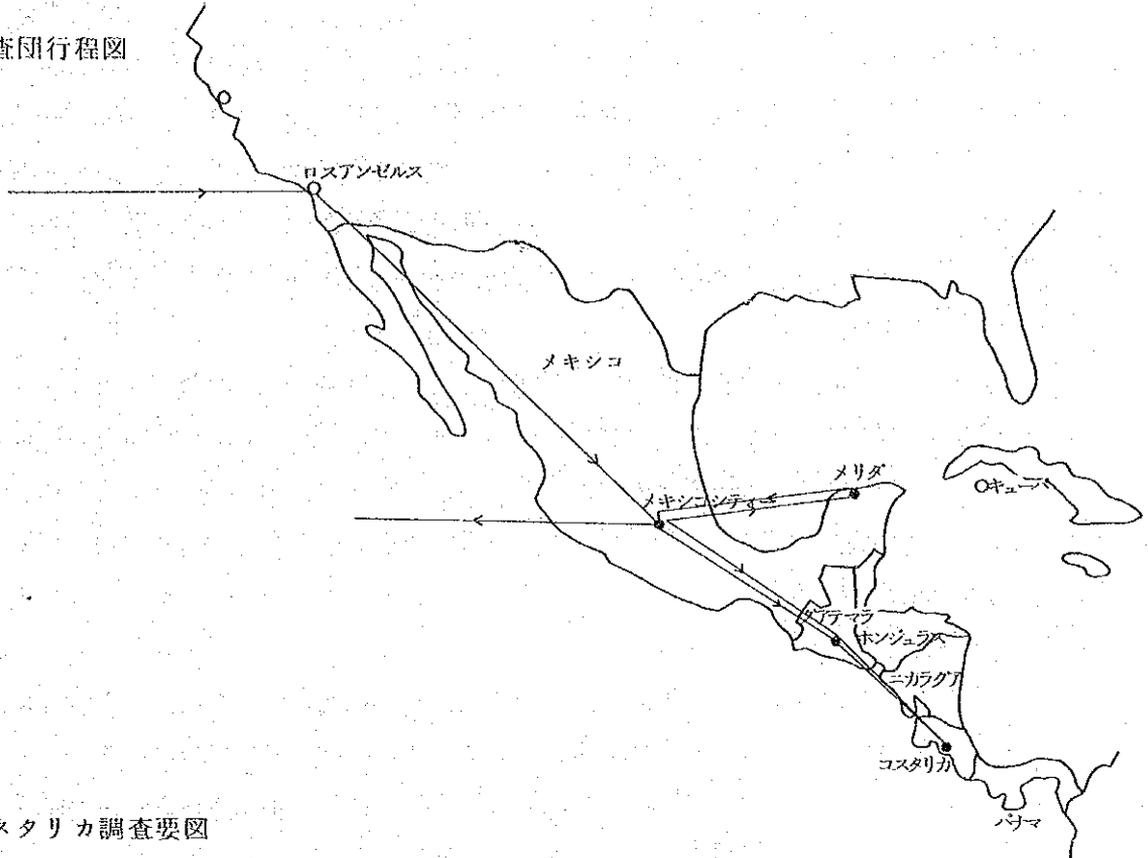
星川祐二 : (株)紀文国際事業管理室

塩崎啓二 : 伊藤忠パナマ支店長

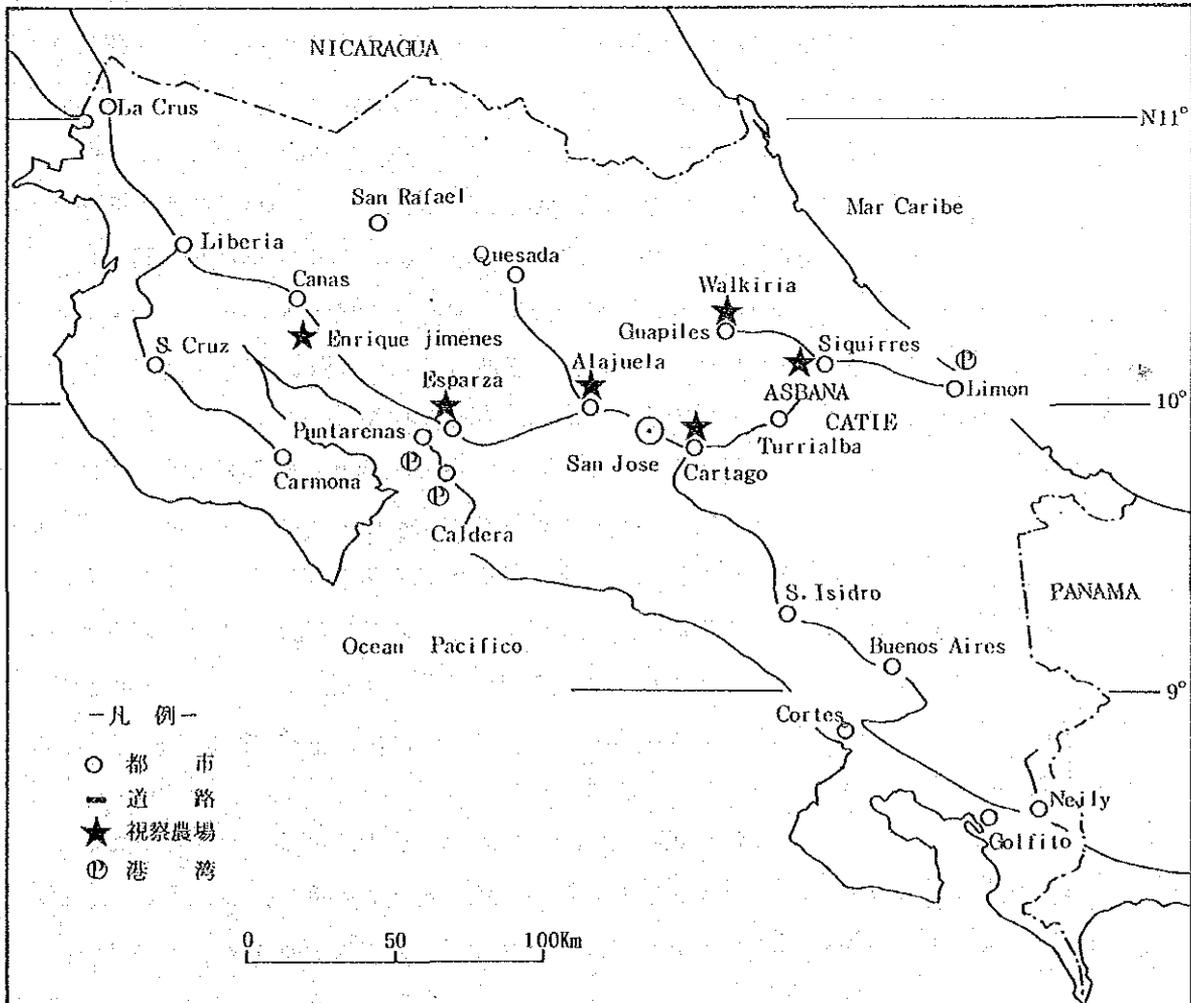
土井良樹 : 伊藤忠パナマ支店車両販売部長

5. 調査団行程図と調査要図

① 調査団行程図



② コスタリカ調査要図



## 6. 調査の概要と総合所見

1) 今次調査団は、コスタリカへの農業開発協力に関連し、ゴマを中心とした同国の畑作及び果樹栽培の現況と課題、投資環境等に関し、基礎的な第一次調査を行なうことを目的とした。このため、本調査団は、別紙日程により、国際農業研究機関を含む各種関係機関での調査のほか、開発候補地との関係で同国の中央高地地域、太平洋側及びカリブ海側の一部地域につき現地踏査を行なった。

2) 近年コスタリカの国際収支は恒常的に赤字を記録、財政収支も容易でない状況にある。同国の対外公的債務残高も1984年末には35億ドルに達している。同国の輸出は従来コーヒー、バナナ、砂糖、牛肉等の伝統的産品に大きく依存してきた。これら4品目で同国総輸出額10億ドル前後のほぼ50%を占めてきた。しかしながら、これら産品の国際的需給の現況及び将来の展望等からして、今後ともこれら産品のみ輸出に大きく依存することは次第に困難になりつつある。

こうした状況を背景に、農業の分野においても新たな輸出産品ないし輸入代替産品の開発が強く求められてきている。そうした産品の創出は、同国の雇用対策上においても極めて重要なこととされている。同国において、国内総生産(GDP)に占める農業の割合は20%程度であるが、産業別就業人口比では30%に近いものとなっている。加えて、近年外資系企業等のバナナ離れが進むなど、雇用対策あるいは農家経営の安定の上からも代替作物の開発が急務とされてきている。

3) 幸い同国の自然の条件は、同国の面積(わが国の四国と中国地方を合わせた程度)に比し、地域ごとに極めて変化に富んでいる。本調査団が訪れたサンホセ・カルタゴなどの同国中央部、プンタレナス、カーニャスなどの太平洋岸、リモン、グアピレス周辺のカリブ海側とでは、距離はそれほど離れてはいないが、気温・降雨量等作物の生育環境にはかなりの差がある。高度差による作物生育環境の変化も大きい。このため、米、とうもろこし、ソルガム等各種の穀物、フリフォーレス(豆)そしてバナナ、柑きつ類などの果実、コーヒー、さとうきび、さらには馬鈴薯、玉ねぎなどの野菜類など、各種の作物が地域や高度の差を反映して現に栽培されており、同国における多様な作物栽培の可能性を示唆している。換言すれば、同国においては各種の作物が試験的事業の対象たりうる自然的条件を有しているといえることができる。

加えて、同国における道路、港湾、通信等物的インフラについては、なお若干の課題を残しつつも、かなり良好なものを見受けられた。さらに、政情の安定、治安の良さに加え、教育、医療等いわば社会的インフラの水準も高い。関連して、若干の農民との対話を通じても農家の技術受入能力も比較的高いものを見受けられた。

4) もちろん、この国での新しい輸出農産品の開発に当たり留意を要する点もある。若干の点を列挙してみよう。①小地域ごとに自然の条件を異にする地域の多様性は、多様な作物栽培の可能性をもつという有利な点もあるが、反面では国際競争力を確保する上で同種同品質の

大量生産を重要な要件とするような産品にとってはむしろ不利に働く場合もありうる。②高温多雨の地方を中心に病害虫の発生頻度もかなり高い。③各種インフラの整備状況は比較的良好と見受けられるものの、国全体としての輸出入量が少ないこともあって、なお定期船、コンテナ船の寄港頻度もそれほど高くない。また、国内貨物運賃についても他物価に比し割高ともいわれている。こうした点からすると、小量でも輸出の単位となり得るもの、貯蔵性が高いもの、さらには運賃負担力が高いものなどが相対的に有利な産品といえることができる。④コスタリカの人口は約238万人('83年)、国内市場は決して大きいとはいえない。輸出産品の安定的な生産を続ける上で、ある程度の国内需要があるということは望ましいことであるが、それがあまり望めない場合には安定的な海外需要のある産品が有利といえる。この意味で、検討対象産品の海外市場調査も重要なこととなる。⑤年による変動はあるものの、この国の1人当たりGDPは1,100ドル('83年)前後と中米諸国の中では高い。労賃も他の開発途上諸国に比し相対的に高い方に属する。こうした点からすれば、労働報酬が比較的高いもの、換言すれば付加価値の高い産品が求められることになろう。

総じていえば、新しい輸出産品はこの国のおかれた上に述べたような各種諸条件を極力活かし、海外市場においても独自の地位を占めうるような産品の開発が求められている、ということができる。

- 5) コスタリカにおいて、現在、新しい輸出農産品を求める動きは強く、一部には具体的な試みもなされつつある。農牧省の話によれば、観葉植物の輸出は既にかんがりの成果を上げつつあり、ココアの増植も進展しつつあるとのことであり、今後とも油糧種子生産や農産物加工など、各種の分野で検討が進むことを期待している由であった。今回、調査団が訪れたバナナ栽培の組合「ASBANNA」(カリブ海側のリモンに近いところ)でもバナナからの転換産品としてベヒバジェ(パルミット用)、トゲバンレーン等、さらには魚、えびの養殖にいたるまで種々の試みが始められていた。コスタリカ大学でも、新たな産品をめぐる薬草、果実、香辛料、畑作等の分野で各種の議論がなされているとのことであった。

しかし、いずれにしても財政事情の現況は容易ではなく、政府関係にのみ多くを依存することは難しく、民間活力に期待することの大きいことをあちこちで耳にした。こうしたこともあって、外国民間企業の技術・資本に期待するところも大きい。このため、詳細は別章に譲るが、外国企業にとっての投資環境整備についても輸出促進との関連で各種の措置が講じられてきている。

- 6) 上に述べたような諸条況を背景に、今回調査で主として念頭におかれたゴマ、果実等の試験的事業に関し、以下に若干の言及をしておきたい。

ゴマについては、コスタリカ周辺の諸国、メキシコはもちろん、グアテマラ、ニカラグア、エルサルバドルにしても南のコロンビア、ベネズエラにしても、それぞれ相当の栽培実績をもっている。それにひきかえ、コスタリカでの栽培実績は皆無に近い。同国の自然の条件が

らすれば不思議といえれば不思議ともいいうる。今回の調査によれば、気温や雨量等の面からみてゴマの栽培可能性は高いものと判断された。現地踏査によっても、太平洋岸北部のグアナカステ地方をはじめ栽培の適地も少なくないとみうけられた。同国には高度の違いによる気温差や乾期・雨期の別のはっきりした地域もあり、熱帯性ゴマのみならず温帯性ゴマの栽培可能性も高い。こうした点などを考慮し、熱帯性ゴマと温帯性の日本種ゴマのそれぞれの長所を活かしつつ、双方を組み合わせた2期作の試験的栽培などは十分に検討に値するものと思われる。

加えてゴマは、油糧種子の中でも単価が高い。そのため、比較的小量でも取引の対象となり易いし、運賃負担力もある。また、貯蔵性もある。こうした点と既に述べてきたこの国の置かれた諸条件とを考え合わせてみると、ゴマはこの国にとって有望な作物の1つということができよう。近年世界におけるゴマ生産は、インド、中国、スーダン、ビルマ、メキシコ、グアテマラ等を中心に年々180~200万トン、その貿易量は25~30万トンで推移し、わが国は世界最大の輸入国(年間7~8万トン)となっている。しかし、世界のゴマの生産量、貿易量とも生産国の自然条件や政情あるいは生産国の大きな内需の動向等を反映し、年次変動が大きい。政情が安定し、農家の技術受容能力も比較的高いコスタリカにゴマ栽培が定着すれば、同国は安定的なゴマ供給国の一角をになう可能性も考えうる。

しかしながら、何といってもゴマは、この国にとってその栽培経験は皆無に等しい。また同国の国内需要には近い将来それほどの期待がもちにくい。いきおい生産物は輸出が中心となり、国際競争力が問われることになる。どれほどのコストでどれ位の品質、収量が上げられるかが大きな鍵になるといいうる。こうした意味で試験的事業実施の意義は大きい。こうした観点からして、今後試験的事業が進められる場合には、立地、品種、栽培法等に関し可能な限り多様な組み合わせによる検討が望まれる。(とりあえず考えられる試験項目等については後章に詳述してある。)関連して、将来の普及段階に備え、普及対象農家の想定、同国産ゴマ需要と普及規模との関係等にも予め留意しておくことが賢明かと思われる。

7) 果樹についてもコスタリカには種類が多い。自然の条件の多様性を反映して、バンレイシ類、グワバ類、サボテ類等数多くの原産果樹のほか導入品種の数も多い。熱帯性果樹のほか標高の高い地域にはリンゴ、モモ等の温帯果樹もみられる。しかしながら、従来果樹やその他の永年作物で輸出産品として重きをなしたものはバナナとコーヒーのみであった。その後カカオ、オイルパームなどの栽培が次第に増加、近年ではマカダミア、マンゴなども輸出用としての試みが始められている。

今回の調査に際し、現地等ではアグリフルーツ、オルタニケ等の柑橘類、バニラ、オールスパイス等のスパイス類に関心が示された。アグリフルーツはマンダリンとグレープフルーツを親としたものといわれ、果肉は橙色、多汁で食味が良いとされている。現在ジャマイカが主産地となっている。コスタリカには近年わずか数本が導入されたのみで同国の栽培

経験はなお極めて乏しい。オルタニクもジャマイカで生れた品種で多汁で独特な風味がある。コスタリカでの開発候補地と目される地域とジャマイカとでは気温などにはそれほどの違いはみられないが、降雨量にはかなりの差がある。新しい輸出用産品として育てるためには従来の栽培経験が乏しいだけに病虫害対策をはじめ各種の試験が重要となる。この意味で試験性は高いといえる。ただ、今後事業を進展させる場合には、上記栽培法などの試験のほか、競合果実との関係、生果の場合の虫害等による輸出先の制約等生産物の市場性、さらには生産の懐妊期間の長いこと等にも留意して検討を進めてゆくことが重要と思われる。

この国には、バニラ、オールスパイス等スパイス類の栽培適地も少なくない。にも関わらず、スパイス類は輸出どころか近隣諸国からの輸入に依存しているものが多いという状況下にある。これらの輸出産品としての育成は、そのこと自体もとより重要なことであるが、果樹類と合わせ栽培することにより、土地の有効利用、収穫期の違いによる合理的な労働配分、果実生産の長期懐妊性の緩和等にも役立つものと思われる。バニラの主産地マダガスカル、メキシコとコスタリカの開発候補地とされる地域とは気象的に類似点が多い。しかし、柑橘の場合同様、それらの国に比し降雨量が相対的に多く、病虫害対策などには十分な留意が必要とされよう。また、今日、香料として使用されている天然バニラは全消費量の5%程度であり、高級品の生産をめざす等市場性についても合わせて検討しておくことが重要と思われる。

- 8) まとめにあたり、新しい産品の技術的開発に関連し留意すべき若干の事項につき付言しておきたい。今次調査を通じての印象は、すでに述べたとおり、①新しい輸出産品ないし輸入代替産品の開発が強く求められていること、②この国の有する多様な自然の条件からすれば各種の作物が検討の対象となりうること、③物的、社会的インフラ等の投資環境も比較的整っていること、そして、その反面では④開発された産品の市場性、それとも関連するが開発された技術の普及性、そうした点への配慮も重要である、ということであった。

もとより技術的開発の重要性はいうまでもないが、同時に検討対象産品の市場をどう考えてゆくか新しい産品だけに十分留意しておいてよい事柄と思われた。輸出産品という性格上需要の中心が海外であり、同種産品間の国際競争力、類似産品間の競合関係、品目によっては輸出先国の制約の状況などが問われうる。

また、開発された技術の普及性は、基本的には農業の担い手の受け入れ能力と産品の収益性の如何にかかっている。例えば、ゴマにしても農家にとって他の作目よりも有利であり、かつ、その栽培技術は農家が駆使しうるものでなければならぬ。コスタリカの農業構造をみると、ブラジル等に比し中小規模の自作農が多いが大規模な経営も少なくない。調査団が訪れた太平洋岸北部カーニャス地方でも機械利用による大規模な稲やソルガムの栽培の状況がみられた。当然のことながら、開発される技術の内容も普及の対象となる経営の如何により異なったものとなる。また、今回行った聞き取り調査によれば、企業的大経営はもちろ

んのこと、中小規模の農家であっても、生産物の販売価格や生産費用に対する反応については比較的敏感な農家が多いとの印象を受けた。換言すれば、農産品に対する政府の価格政策、民間の買入れ価格の状況如何が産品生産の消長に大きな影響を与えるものと思われた。

なお、特に1点付言しておきたいことがある。これまで主として新たな輸出農産品に関してふれてきた。しかし、国際収支の改善等の観点からすれば、輸入代替産品についても検討されてよいことはいうまでもない。例えば大豆がある。近年この国の穀物の自給率は高まり米などは過剰にさえなっている。しかし、大豆はなおその多くを輸入に依存している。多様な自然の条件を有するこの国に大豆の栽培適地がないわけではない。立地、品種、栽培法さらには施策の如何によってはかなりの生産が見込みうる可能性もあろう。ただ今次調査団派遣の経緯等からして、今回の調査は新たな輸出産品の検討に焦点があてられた。輸入代替産品については、今後さらに検討が深められることを期待したい。

以上、いずれにしても、コスタリカ経済の現状および同国とわが国との諸関係からみても今後試験的事業に関しさらに検討が進められることを期待したい。

## Ⅱ コスタリカの一般情勢

### 1. 一般概況

#### (1) 国土・自然環境

- 1) コスタリカは面積約5万<sup>km</sup>で、日本の約7分の1、四国地方と中国地方を合わせた面積とほぼ等しい大きさの小国である。

中米地峡の南部に位置し、北はニカラグア、南はパナマと国境を接している。この国の中央をグアナカステ山脈、タラマンカ山脈等が走り、国の中央部には、平均標高約1000mの高原が展開している。この中央高地帯に対し、カリブ海側の海岸にかけては低地平原が広がり、他方太平洋岸には海岸まで山脈が迫っている。ただし、太平洋岸西北部のグアナカステ地方は低地平原を呈している。

- 2) 以上のような地形的特徴から、コスタリカの気候は、地域によって大きく異なっている。海岸に続く低地は熱帯気候であるが、中央部の高地帯は温暖で、更に標高の高い山岳部では寒冷の気候も見られる。

- 3) コスタリカの中心はこの中でも中央高地帯(盆地)である。この中央盆地は標高 000 ~ 1200 m にあり 65 km<sup>2</sup> に及んでいる。熱帯の高原であるため一年中快適な気候となっており、年間を通じ摂氏14度から20度位の気温である。人口60万人を超える首都サンホセ、この国第2の都市アラフエラ市(人口約32万人)、旧都カルタゴ市(人口約20万人)も、いずれもこの中央盆地帯に位置し、この国の人口約240万人のうちの約65%がこの中央盆地帯で生活している。

- 4) この国の雨量は比較的多く、中央高地で年間1,900mm、太平洋岸では2,000mm、カリブ海岸では2,500mm程度となっているが、地域によってはグアナカステ地方の800mm程度からリモン地方の一部では4,000mmを超えるところもある。乾季はおおむね12月から4月であるが、この間、まったく降雨がみられないという地域はない。(表Ⅱ-①)

#### (2) 政治・社会

##### 1) 歴史

1502年、コロンブスが彼の第4次航海の途中、大西洋岸のリモン港に寄港したのがこの地域が発見された最初であった。その後1520年頃から入植が始まり、1542年スペインがグアテマラ総督領を設置するにあたり、この地域もその領地に合併され、以来コスタリカ(豊かな海岸)と呼ばれ続けている。この国の独立は1821年9月15日とされるが、これはグアテマラ総督領がスペインから独立宣言したもので、その後共和国として完全独立したのは1848年8月のことであった。

##### 2) 政情、人種

政治体制は立憲共和制をとり、現行憲法は1949年11月発効したものである。立法

表Ⅱ-① 代表地点における気温と降雨量

地 点 ( 気候区分 )	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	平均
BARRA DEL COLORAD ( Afw )	240	245	247	250	257	258	255	252	255	255	245	240	249
RINCON DE OSA ( Afw )	370	190	90	170	250	350	510	505	180	350	550	700	351
VOLCAN DE BUENOS AIRES ( Amw' )	258	258	255	258	265	267	264	262	264	260	261	267	262
VILLA MILLS ( Cw'a' )	100	90	100	180	330	360	410	500	410	650	450	200	315
CANAS ( Aw'i )	236	240	245	250	247	242	237	239	239	235	234	233	239
TURRIALBA ( Cfa )	50	60	70	210	410	400	350	390	410	550	310	90	275
	98	100	115	110	119	116	115	110	108	106	105	95	108
	40	30	35	70	380	460	290	290	430	500	270	150	245
	245	240	247	248	250	255	257	260	260	257	260	257	253
	20	30	20	50	210	280	180	200	320	360	100	20	149
	210	212	221	223	227	231	230	231	231	231	225	213	223
	160	140	70	120	210	290	270	210	220	250	270	310	210

出所 : (Algunos Aspectos Basicas Agrologicos de Costa Rica 1980)

府は議員数57名の一院制の国会から成る。国会議員の任期は4年で、連続しての再選は許されない。大統領は国民の選挙で選ばれ、任期は4年で再選は憲法により禁止されている。行政権は大統領及び内閣によって行使される。司法権は最高裁判所及びその他の裁判所によって行使される。最高裁判事の定数は17名で国会によって選任され任期は8年である。

三権分立に加え、この国の第四権とされている「選挙管理委員会」は、4年ごとに行われる大統領選及び国会・市議員選の一部始終を総括するものである。

現在の政権は、1982年2月の総選挙で選出された国民解放党(P.L.N.)のL.A.モンヘ大統領の下にあり、また国会も同党が過半数の33議席を占めている。次期総選挙は1986年2月に行われるが、左右いずれにせよ極端な政治勢力は育っておらず、また、与野党間の掲げる政策も大差のないものとなっている。

コスタリカは、軍隊がなく文民統治の伝統が続いていること、教育が普及し識字率が高いこと、経済的貧富の差が他の中南米諸国に比べ比較的小さいこと、国民のほとんどが白人系で人種構成が単純なこと、平和な国民性であること、などにより政治的にたいへん安定した国家であると言える。その理由は、遠く歴史にさかのぼり、スペインがメキシコペルー一帯を征圧した時代、幸いにもこの地に金銀が産出されず、原住民も少なかったため、この地が放置された辺境であったことに求められる。やや遅れてこの地に入った白人は自らの手でこの地を開拓せざるを得ず、おのずから自ら耕す範囲が規定され、従って比較的均一な自作農社会が形成され今日の民主的社会の基礎となったものと思料される(表Ⅱ-②-1)。現地の人種構成は、98%が白人又は白人系混血で占められ、混血の割合は低く、ほとんど白人国と考えられている(表Ⅱ-②-2)。

表Ⅱ-②-1 コスタリカの農家数(1982年)

	農家数	構成比
自作農	65,096戸	84.5%
自作+小作	8,081	10.5
小作	3,821	5.0
合計	76,998	100.0%

出所：コスタリカ中央銀行

表Ⅱ-②-2 耕地面積別自作農の農家数(1982年)

	自作農農家数	構成比
20ha未満	43,481戸	66.8%
20～50	11,180	17.2
50～100	5,281	8.1
100ha以上	5,154	7.9
合計	65,096	100.0%

出所：コスタリカ中央銀行

(3) 経済、国際収支

コスタリカの経済構造は、バナナ、コーヒー、砂糖、牛肉等農牧業を中心とする伝統的経済で、これら農畜産品の国内総生産に占める割合は約20%となっており、農業部門の就業人口は全就業人口の30%を占めている。

最近の経済情勢については、1976年から79年まで年平均6.4%のGDP成長率を記録したが、1980年には0.8%、81年にマイナス4.6%、82年はマイナス9%と急速に落ち込み、経済情勢は下降の一途をたどった。これは、コーヒー等主要輸出産品の国際価格の低落、輸入品の高騰、域内貿易の縮小、対外債務の増大によるものと考えられる。なお83年には、GDP成長率はプラスに転じ、84年には6.6%の成長が達成され、また、インフレの沈静化及び為替の安定化等ある程度の経済状況の改善が見られている。

コスタリカの主要経済指標	
国内総生産(GDP)	3,040百万ドル(83年)
1人当たり国民総生産(GDP)	1,140ドル(83年)
実質GDP成長率	6.6%(84年)
国家財政規模(85年予算)	
歳入	269億コロン
歳出	313億コロン
失業率(84年)	4.9%
インフレ率	11.1%
貿易(83年)	
輸出(FOB)	870百万ドル
輸入(CIF)	991百万ドル
主要輸出品	コーヒー、バナナ、牛肉
外貨準備高(84年6月)	403.8百万ドル
公的対外債務残高(84年末)	3,531.6百万ドル

主要経済指標は別掲のとおり。

( 財政 )

1979年から1982年までの財政赤字の対GNP比は、それぞれ13.5%、11.2%、14.3%、9.1%であったが83年には3.2%であったと見込まれており、82年以降の回復は、モンヘ政権の企業に対する収益税、課徴金の設定、各種増税措置、公共料金の値上げ、財政支出の削減等の諸措置によるものと思われる。

( 物価 )

この国の通貨であるコロン的大幅下落による輸入消費財、原材料の高騰等から、消費者物価上昇率は1979年には8.5%だったものが、80年には13.8%、81年には53.3%、82年には90%となった。83年に入って沈静化し、84年には11.1%にとどまったと見込まれている。

( 為替 )

1968年より81年まで、1ドル=86コロンを維持してきたところ、81年秋に変動相場制を採用して以来、82年中頃には1ドル=60コロン台まで下落した。しかし、83年秋より、1ドル=43コロン台に落ち着いた。84年中に数回に亘って小幅な切下げが実施され1ドル=47.75コロンとなった後、1985年6月現在では1ドル=50.35コロンである。

( 貿易、国際収支 )

20数年來の恒常的入超を続け、特に80年には輸出の50%強に相当する526.6百万ドルの入超となったが、83年には131百万ドルの入超にまで改善した。しかしながら、この改善は、輸出が伸びたためではなく、むしろ輸入減によるところが大きく、輸出自体は中米共同市場の状況の悪化、伝統的輸出農産品の国際価格の下落等により1980~81年の1,000百万ドルから83年は862百万ドルに減っている。(表Ⅱ-③)

( 対外公的債務 )

恒常的財政赤字を対外借り入れで補填してきたところ、対外公的債務は、1979年に約14億ドルだったものが、84年末には35.3億ドルに達した。

81年8月より国際機関に対するものを除き、すべての返済が停止されていたが、モンヘ政権になつてから、債務に対する一部利子支払いが再開され、83年1月にパリ・クラブ(先進国債権者会議)で約2億ドルの債務の繰り延べの合意が成立した。また、85年4月には第二次パリ・クラブが開催され、85年1月1日から86年3月31日までに支払い期日の到来する債権及び84年12月末現在の延滞分についての債務繰り延べにつき合意が成立した。

( 我が国とコスタリカの貿易 )

日本とコスタリカとの貿易は、従来から日本の著しい出超となっており、1984年にお

いては、日本のコスタリカに対する輸出が72.5百万ドルであったのに対し、日本のコスタリカからの輸入は、わずかに6.2百万ドルに止った。(表II-④, ⑤)

表II-③

コスタリカの国際収支

(単位：百万ドル)

	1980	1981	1982	1983 (暫定)
経常収支	-663.9	-426.4	-233.5	-341.4
貿易収支	-526.6	-210.7	-27.6	-131.1
輸出(FOB)	1000.9	1002.6	865.8	862.4
輸入(CIF)	-1527.5	-1213.3	-893.4	-993.5
貿易外収支	-151.8	-242.7	-240.4	-280.9
移転収支	14.5	27.0	34.5	70.6
資本収支	45.9	-0.8	-30.2	220.9
民間 (含、誤差脱漏)	-180.8	-69.3	8.8	166.9
公的部門	226.7	68.5	-39.0	54.0
外貨準備高 (ネット)	-455.8	-470.2	-313.8	73.5

(出所：IMFレポート)

表Ⅱ-④ コスタリカの輸出入

(単位：百万ドル)

	1980	1981	1982	1983 (暫定)
輸出(FOB)	1,000.9	1,002.6	865.8	862.4
バナナ	207.5	224.8	229.4	237.3
コーヒー	247.9	240.1	236.9	228.4
牛肉	70.7	73.9	53.1	31.5
砂糖	40.7	42.0	16.6	23.5
輸入(CIF)	1,527.5	1,213.3	893.4	993.5
原材料	562.5	483.7	362.2	435.4
資本財	324.6	258.6	167.2	152.2
消費財	388.0	251.9	167.0	225.8
潤滑油、燃料	229.1	205.3	189.0	180.1

(出所：IMFレポート)

表Ⅱ-⑤ 我が国の対コスタリカ貿易

(単位：千ドル)

年 品目	1981	1982	1983	1984
輸出総額	6,911.6	2,652.2	4,425.8	7,247.9
重化学工業品	6,664.5	2,486.7	4,107.9	
金属品	1,330.1	1,085.7	1,398.6	
(鉄鋼)	1,134.0	958.9	1,229.5	
機械機器	5,072.6	1,102.5	2,408.2	
(一般機械)	948.3	461.3	6,070	
(電気機械)	2,482.4	2,924	5,143	
(自動車)	1,152.0	729	7,731	
輸入総額	6,791	1,058.2	7,069	6,249
食料品	6,319	1,001.4	5,830	
コーヒー豆	3,453	5,967	2,680	
バナナ	0	0	1,781	
ココア豆	2,340	1,839	1,368	
原料品	399	275	858	
植物原材料	181	247	857	

(出所：通関統計)

## 2. 農業の動向

### (1) 経済全体に占める農業の役割

この国の農業産出額は国内総生産の約21%を占め、労働人口の約30%が農業に従事し、また、輸出総額の約3分の2が農産品で占められているなど、コスタリカの農業は、この国にとって最も重要な産業である(表Ⅱ-⑥, ⑦)。従来から、この国は世界のコーヒー、バナナ輸出国としてその名を知られてきており、この2つの伝統的輸出産品への依存度はきわめて高い。コスタリカは基本的にコーヒー、バナナの生産を中心とした農業国であり、70年代の経済成長はコーヒー、バナナ市場の好調に支えられた輸出拡大が背景にあり、一方、80年代の経済不振はコーヒー、バナナ価格の低迷を抜きには語れない。また83年の景気上昇も、米の豊作を主因とする農業部門の回復があり、84年はコーヒー、バナナ価格の上昇により輸出価額が伸びたという背景があったものである。

次に、コスタリカの農業に占める各作目の産出額の割合は、表Ⅱ-⑧のとおりである。この国の最も重要な作目は上述のとおり、コーヒーとバナナである。これに続いて第3位は牛乳、第4位は米(陸稲)、第5位は牛肉、第6位がさとうきびとなっており、以上6作目で農業産出額の4分の3を占めている。

表Ⅱ-⑥ 国内総生産(GDP)の産業別構成比(66年価格)

(単位：%)

産業部門	年	1979	1980	1981	1982	1983
農業		18.2	18.0	19.3	20.2	21.0
製造業		21.9	21.9	22.4	20.9	20.4
電力		2.1	2.3	2.6	3.0	3.5
建設		6.4	6.3	5.0	3.7	3.5
商業		18.7	18.0	16.5	15.0	14.8
運輸・通信		6.7	7.0	7.1	7.7	7.7
金融		5.1	5.2	5.2	5.7	5.8
政府調達		9.7	10.0	10.4	11.2	11.1
その他		11.2	11.4	11.5	12.4	12.2
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：コスタリカ中央銀行

表Ⅱ-⑦ 国内総生産（GDP）の産業別実質成長率

（単位：年率％）

	1979	1980	1981	1982	1983
農 業	0.5	△0.5	5.1	△4.9	4.4
製 造 業	2.7	0.8	△0.5	△14.9	△1.8
電 力	5.1	11.9	7.8	5.6	18.0
建 設	19.3	△1.0	△21.7	△32.6	△6.0
商 業	4.1	△3.0	△10.6	△16.8	△1.0
運 輸 ・ 通 信	12.4	5.2	△0.7	△2.2	1.1
金 融	9.5	2.9	△2.0	0.3	2.6
政 府	5.9	3.6	1.8	△2.0	△0.4
そ の 他	4.1	1.7	△0.7	△2.2	△1.0
計	4.9	0.8	△4.6	△9.1	0.8

出所：コスタリカ中央銀行

## (2) 主要農産物の生産動向

コーヒーの生産は、近年、栽培面積を制限する一方で新種導入を図るなど生産量は12万トン弱で横ばい。バナナについても115万トン弱で横ばい、同じくさとうきびも横ばいの状態が続いている。これに対して基幹穀物は近年の生産奨励策もあり生産量はやや増加傾向にあり、特に米は人口240万人に対し（もみ米）生産量24万トンとなり過剰気味となっている。牛肉については近年の落ち込みは過去の大量屠殺の反動によるものである（表Ⅱ-⑨）。

## (3) 基幹穀物の生産奨励策

コスタリカの基幹穀物は、米、とうもろこし、フリフォーレス（いんげん豆）、ソルガム及び小麦である。自給率を推計すると、まったく生産されていない小麦は0％として、1983年には米が豊作もあって139％、とうもろこし55.5％、フリフォーレス64.6％であったと思われる（表Ⅱ-⑩）。

国内で生産されるこれら基幹穀物については食糧庁（CNP）が生産者から支持価格により買上げる制度がある。（1983年7月の買上げ価格は1キログラム当たりで、米（もみ米）12.2コロン、トウモロコシ11.1コロン、ソルガム11.4コロン、フリフォーレス33.4コロンであった。）実際に食糧庁が買上げた数量は国内生産量に対し（1982/83年度で、米が3.3％、とうもろこし39.9％、フリフォーレス65.8％、ソルガム72.3％であったが、米については近年生産過剰で買上げ制限が行われている。（参照表Ⅱ-⑪）

表Ⅱ-⑧ 農業粗産出額に占める各作目の産出額の割合（1966年価格）

（単位百万コロン，％）

年 作目	1980	1981	1982	1983(暫定)
国内総生産（1966年価格）	9,647.8	9,429.6	8,573.2	8,639.2
（参考）"（名目）	4,140.55	5,710.27	9,700.23	12,571.06
うち農業部門（1966年価格）	1,736.1	1,824.6	1,735.2	1,811.5
（参考）"（名目）	7,372.1	13,144.5	23,949.7	29,314.4
農業部門の割合（1966年価格）	18.0%	19.3	20.2	21.0
I 農産物	64.2	63.5	65.8	69.5
A 基礎穀物	9.4	8.9	7.4	11.0
(1) 米	7.0	6.5	4.7	④ 8.0
(2) トウモロコシ	1.3	1.4	1.5	1.8
(3) フリフォーレス(いんげん豆)	0.5	0.5	0.7	0.7
(4) ソルガム	0.6	0.5	0.5	0.5
B 輸出産品	47.7	48.1	51.5	51.1
(1) コーヒー	21.0	21.7	23.7	① 23.9
(2) バナナ	21.5	21.4	22.8	② 22.3
(3) さとうきび	4.6	4.5	4.6	⑥ 4.7
(4) カカオ	0.6	0.5	0.4	0.2
C 棉花	0.1	0.1	0.1	0.2
D ジャガイモ	1.2	0.8	1.0	1.3
E キヤッサバ	0.1	0.1	0.1	0.1
F タバコ	0.3	0.3	0.3	0.3
G 料理用バナナ	1.9	1.9	2.0	2.1
H その他(カボチャ, ニンジン等)	3.5	3.3	3.4	3.4
II 畜産物	27.0	28.4	26.8	26.4
A 牛肉	9.0	10.9	8.8	⑤ 7.6
B 豚肉	2.1	2.1	1.9	2.0
C 鳥肉	0.8	0.7	0.6	0.6
D 牛乳	11.1	10.8	11.4	③ 12.2
E タマゴ	4.0	3.9	4.1	4.0
III 水産物	2.4	1.9	1.7	1.5
IV 林産物	3.8	3.5	3.1	2.6
V その他	2.6	2.7	2.6	-
合計(I~V)	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：コスタリカ中央銀行

なお、生産者が食糧庁以外の任意の相手に販売するのは自由である。

一方、これら基幹穀物を輸入する場合には、全量が食糧庁の一元輸入とされている。食糧庁は、生産者に対する合理的な支持価格による国内生産物の買上げと国際市場での輸入買付けと、さらに消費者に対する合理的な売却価格での売渡しを一定の財政負担の中で行うものであるが、近年は生産奨励のはねかえりで強まってきた財政負担の重みから、85年産から米を買上げ対象からはずす等、苦しい対応を迫られている。

表Ⅱ-⑨ 主要農産物の生産動向

(単位：千トン)

年 作目	1979 (A)	1980	1981	1982	1983 (B)	B / A
コ ー ヒ ー	986	1064	1131	1153	1184	120.0%
バ ナ ナ	1,154.3	1,110.8	1,141.3	1,136.2	1,143.3	99.0
さ と う き び	2,615.1	2,516.5	2,521.0	2,446.2	2,516.4	96.2
コ コ ア	104	5.3	5.0	3.5	2.3	—
米	219.6	230.6	222.5	148.6	259.7	118.3
トウモロコシ	72.9	75.3	82.8	86.5	98.9	135.7
フリフォーレス	11.3	11.5	12.3	16.3	14.4	127.4
牛 肉	137.3	118.5	147.6	111.2	96.7	70.4

出所：コスタリカ中央銀行

表Ⅱ-⑩ 基幹穀物の自給率

(単位：千トン)

項目	年				
	1979	1980	1981	1982	1983
米(精米換算)					
生産量	131.8	138.4	133.5	89.2	155.8
消費量	102.1	105.2	107.7	109.2	112.1
生産/消費	129.1%	131.6%	124.0%	81.7%	139.0%
とうもろこし					
生産量	72.9	75.3	82.8	86.5	98.9
消費量	156.7	166.5	173.3	173.0	178.3
生産/消費	46.5%	45.2%	47.8%	50.0%	55.5%
フリフォーレス					
生産量	11.3	11.5	12.3	16.3	14.4
消費量	20.1	19.5	20.0	21.3	22.3
生産/消費	56.2%	59.0%	61.5%	76.5%	64.6%
小麦					
生産量	—	—	—	—	—
消費量	87.6	103.3	88.4	93.5	101.9
生産/消費	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

出所：コスタリカ中央銀行

表Ⅱ-⑪ 食糧庁による支持価格での買上げ

	1980/81			1981/82			1982/83		
	生産量	買上量	その割合	生産量	買上量	その割合	生産量	買上量	その割合
米	243.6	28.2	11.6%	202.0	10.1	5.0%	148.4	4.9	3.3%
とうもろこし	88.0	30.0	34.1	82.9	22.3	27.0	87.6	34.9	39.9
フリフォーレス	12.3	8.9	72.4	16.3	3.4	21.0	14.4	9.4	65.8
ソルガム	41.6	26.1	62.8	30.6	21.6	70.5	27.7	20.0	72.3

出所：食糧庁

(注) 生産量に関する統計はコスタリカ中央銀行のそれとは多少異なる。

(4) 伝統輸出産品の最近の動向

コスタリカの伝統的輸出産品は、コーヒーとバナナである。これに牛肉と砂糖を加えた4品目がこの国の主たる輸出産品である。

a. コーヒー

コーヒーは1850年以來の伝統的な輸出産品で、中央高原を中心に栽培されており、現在、国内産出額の30%、輸出額の25%を占めている。コスタリカは国際コーヒー協定(ICCO)の加盟国であり、輸出はこの協定の定める割合に従い行われ(例年シェア2~3%)それ以外は非加盟国へ低価格で輸出されている。

コーヒーの生産量は農園の改修や新種導入により1979年以降増加しているが、国際市況が80年以降低迷し、輸出額そのものは減少している(1980年の248百万ドルから1980年230百万ドル)(表II-⑫)。

表II-⑫ コスタリカのコーヒーの生産及び輸出

年 項目	1979	1980	1981	1982	1983
生産量(千トン)	98.6	106.4	113.1	115.3	118.4
輸出量(千トン)	96.2	70.9	95.2	92.6	104.4
輸出額(百万ドル)	315.1	247.9	240.1	236.9	230.1
(参考)指標価格 ニューヨーク市場 USセント/ポンド	169.50	150.71	115.82	125.62	127.94

出所：コスタリカ中央銀行。指標価格はIMFによる。

b. バナナ

コスタリカのバナナは、コーヒーと並ぶ重要な輸出産品であり、比較的市況変動が小さいことから、安定した外貨獲得源となってきた。カリブ海沿岸低地と太平洋岸南部の熱帯地域が重要な栽培地であるが、このうち太平洋岸のバナナ産業は、70年代初めにそれまで伝統的な市場であった日本をフィリピンバナナに明け渡してからは、米国カリフォルニア州向け輸出を中心としてきた。ところが、昨年来カリフォルニア州市場においても、ライバルである他の中南米産バナナに対して価格競争力の面で問題を生じてきた。これは、コスタリカの労働コストが比較的高いということも一面あるものの、バナナに対する輸出税の課税措置が新たに負担となったことも原因とみられている。

こうした中で、太平洋岸コトブルス地方に本拠を持つコスタリカ・バナナ会社(COMPANIA BANANERA DE COSTARICA, 米国UNITED BRAN

DS社の子会社)は、輸出競争力減退を理由に昨年来バナナ事業からの撤退を表明している(同社所有バナナ園は約3,500ヘクタールといわれる)。

コスタリカ政府は、1985年のバナナ輸出を260百万ドルと計画しているが、この目標達成はむずかしい状況にある(表Ⅱ-⑬)。

なお、国内のバナナ生産の55%が米国系、45%が独立生産者で行われているが、米国系は労働問題、独立系は農園設備の老朽化という問題をかかえている。

表Ⅱ-⑬ コスタリカのバナナの生産及び輸出

	1979	1980	1981	1982	1983
生産量(千トン)	1,154	1,111	1,141	1,136	1,143
輸出量(千トン)	1,025	973	1,002	1,017	1,025
輸出額 (百万ドル)	190.5	207.5	224.8	228.1	233.8
(参考)指標価格 ニューヨーク セント/ポンド	14.78	17.01	18.20	16.99	19.47

出所:コスタリカ中央銀行。指標価格はIMFによる。

#### c. 牛 肉

牛肉は国内需要と中南米諸国向けの輸出のため生産されている。1979年から1980年にかけての牛肉価格の高騰で大量屠殺を行ったため、1982年以降の食用牛の減少を招き、生産量は低迷している(表Ⅱ-⑭)。

#### d. 砂 糖

砂糖も伝統産品の一つで、国内産出額の5%、輸出の3%を占めている。生産量は大きな天候異変がなく順調であるが、砂糖市況が低迷しているため、外貨獲得の貢献度は低い(表Ⅱ-⑮)。

表Ⅱ-⑭ コスタリカの牛肉の生産及び輸出

	1979	1980	1981	1982	1983
生産量(千トン)	137.3	118.5	147.6	111.2	96.7
輸出量(千トン)	31.6	26.0	33.2	24.3	13.7
輸出額(百万ドル)	81.7	70.7	73.9	53.1	30.0
(参考)指標価格 ニューヨーク 冷凍牛肉、セント/ポンド	130.82	125.19	112.12	108.39	110.67

出所:コスタリカ中央銀行。指標価格はIMFによる。

表Ⅱ-⑯ コスタリカの砂糖の生産及び輸出

	1979	1980	1981	1982	1983
生産量(さとうきび千トン)	2,615	2,517	2,521	2,446	2,516
輸出量(千トン)	68.3	71.5	71.2	54.1	53.3
輸出額(百万ドル)	17.5	40.7	42.0	16.6	23.9
(参考) 指標価格 ニューヨーク セント/ポンド	8.79	21.79	16.92	9.42	9.39

出所：コスタリカ中央銀行。指標価格はIMFによる。

(5) 農業問題の現状

コスタリカの農業問題とは、以上見てきたとおり、コスタリカの経済、社会全体の問題という視点でみるのがなにより大切である。

その第1は、バナナ産業からの米系企業の撤退にからむ「バナナ問題」で、

- (i) 失業という社会問題
- (ii) 輸出産業の衰退という経済問題
- (iii) 輸出税という財政問題

という観点が必要である。従ってこの対策として指向されるのは、当然のことながら、

- ① バナナ園の転換作物の模索と② 新たな輸出作物の開発、である。

このバナナの問題と同様なことは、もう1つの主要農産物であるコーヒーについても言えることである。バナナ、コーヒーからの転換作物については国をあげて議論が尽くされているが、IMF管理下の経済運営を強いられている現状では、例えば生産奨励金、農業制度金融、転換に伴う減税といった財政負担を伴う形でのバックアップが(制度として存在しないということではなく)十分に機能するにはほど遠い状況にある。

主な転換作物として現在考えられているものはカカオである(前項でみたバナナ産業からの米系企業撤退後にはカカオに転換される方針が決まっている)。

その他輸出を前提として以下の方向が重視されている。

- ア. 野菜の生鮮輸出
- イ. 果実の加工輸出
- ウ. 植物油の加工輸出
- エ. 観用植物の輸出

この国の農業問題のその2は、米(陸稻)の生産過剰問題である。基幹穀物の生産奨励はこの国だけではなく世界のどの国でも重要な農業政策の柱である。コスタリカも基幹穀物の自給に対しては手厚い政策を講じている(前項参照)。この米(陸稻中心)の生産過剰は、

畑作の調整の問題であり、とりもろこし、ソルガム、フリフォーレス（豆類）への生産インセンティブの調整で解決されるべきものではあるが、具体的には、財政面からの制約、消費者物価へのはね返り等々なかなか困難な問題である。更に、米過剰がもたらした後遺症は単に米の支持価格による買上げを廃止したということにとどまらず、基幹穀物全体の支持価格制度が実効上（財政負担問題から）十分機能しなくなる恐れがあるということである。

総じてこの国の農業は、上述の当面の課題のほか、基本的に転換期にあるとみられる。主要穀物については近年著しく自給率が高まってきているが他方では近年国内需要の高まりをみせている大豆（製品）等についてはなお国内生産が追いついていないなどの問題もある。さらに、従来この国の輸出の大宗をになってきたバナナ、コーヒー、砂糖、牛肉等の輸出の展望についても、それほどの期待は考えにくく、新たな輸出農産品の開発が強く求められている。このことは、この国の就業構造上、雇用が農業に依存する面が大きいだけに、雇用対策上もきわめて重要な課題となっている。

このように課題は山積しながらも、主として経済・財政面からの制約もあり、政府ベースのみでは解決の糸口が容易に見いだせないというのがこの国の農業のおかれた現状である。

### 3. 経済政策、外資制度等

#### (1) 経済政策目標

コスタリカの当面の経済政策目標は、一言でいえば、対外債務問題の早期解決ということである。

#### （対外債務及び外貨繰り計画）

1984年末のコスタリカの総債務残高は民間債務（推定4～5億ドル）を含めると約42億ドルと推定され、債務の対GDP比率は125%前後となり、ほぼ前年度と同水準で、依然として大きな重荷となっている。

1985年の外貨繰りについては、使途2,032百万ドルに対し、調達見込みは1,970百万ドルと、差額62百万ドルの不足が生じる計算となっている。民間銀行によるリファイナンスには、85、86年末までに期限の到来する公的債務元本（約2.8億ドル）の繰り延べ、83年9月調印済の救済融資（約6.3億ドル）の一部期間延長（約2億ドル）と返済分の繰り延べ（約1.9百万ドル）が含まれている（表Ⅱ-⑩）。

表II-⑩ コスタリカの1985年外貨繰り計画

調 達		使 途	
1. 輸 出	783.5	1. 輸 入	710.0
2. 公的部門借入	805.9	2. 公的部門支払	962.2
a IMF	44.0	a 元本返済	606.9
b USAID	95.0	(内、リファイナンス)	(403.8)
c 世銀	80.0	b 利払い	355.3
d 民間銀行	75.0	3. 民間部門支払	57.3
e 同(リファイナンス)	403.8	4. 延滞利息支払	85.0
f その他	108.1	5. 貿易決済遅延分支払	21.0
3. 民間部門への資本流入	61.7	6. その他	196.8
4. その他	319.2		
調達計	1,970.3	使途計	2,032.3
差 引	62.0		

出所：コスタリカ中央銀行

公的部門の借入については、現在までにIMF、世銀は承認済みで、また、USAIDについても供与は確実となっており、あとは民間銀行からの新規借入れ75.0百万ドルとリファイナンス403.8百万ドルが残されている。しかし、この分もすでに85年1月に当国とアドバイザーコミッティーとの間で基本合意に達していることから、1985年の資金繰りについては一応の目途が立ったと言える。

(1985年の経済運営方針)

1985年についても、IMFの指導下、緊縮財政、輸出振興、輸入抑制を行ない、財政赤字の対GDP比は1.5%（84年見込みは2.5%）、経常収支赤字の対GDP比は9%（84年見込み11.0%）を目標としている。

具体策として以下の諸策を実施する予定である。

- a) 財政赤字削減策としては、公共料金の引上げ（電気料金13%引上げ等）、食品価格引き上げ（豆、とうもろこし 5%）、公務員の定員凍結と賃金抑制。
- b) 金融政策としては、金融引き締めと国内貯蓄増加のための金利引上げ。
- c) 経常収支改善に向けては、加工食品、繊維等の非伝統的輸出産品の輸出振興、特に従来からの中米共同市場圏以外への輸出振興（輸出税の撤廃等）をはかり、引き続き輸入抑制

を行うことによる貿易収支の改善。

(2) 輸出促進政策

(A) カリブ海特惠関税システム

略称 C B I

the Caribbean Basin Initiative

この制度は米国がコスタリカ等に対し供与した特惠制度である。コスタリカから米国に対して輸出される農産物を含めた加工産品がコスタリカ国内で35%の付価価値を付された場合には、米国は輸入に関するすべての制約を免除する(no-quarterm & no-tariff)というものである。

この35%についてはコスタリカ国内で20%プラス米国内又は他の第3国で15%が付価されて米国内で流通するという形態も容認されるものである。

(B) フリーゾーン

(Free Zone)

コスタリカ政府の加工輸出産業育成政策とは、

- ① フリーゾーンの指定
- ② ドローバック契約
- ③ C A Tの発給

により、企業に対しインセンティブを与えるというものである。

加工輸出企業は申請を行うことにより、政府(フリーゾーン保税事務所、略称ZON. F)によりフリーゾーンとしての指定を受けた当該企業は、次の恩恵を受けられる。

- (i) 資機材、原材料の輸入税の全額(100%)免除。
- (ii) 製品の輸出税の全額(100%)免除。
- (iii) 法人税については、当初の6年間は全額(100%)免除、引き続き4年間は半額(50%)免除。
- (iv) 地方税(収益に課せられる地方税)は全額(100%)免除。
- (v) 外貨の使途自由。ただし、コスタリカの通貨であるコロン貨との交換使用は中央銀行の規制下に置かれる。

(C) ドローバック(輸入関税免除)

この制度は、コスタリカの輸入企業が政府との間で、「輸入した原材料を利用して輸出する」という契約(いわゆるDRAW-BACK契約)を締結することにより、政府は当該輸入企業に対し、輸入した資材及び原材料に係る関税を免除するというものである。

なお、IMFは財政健全化の観点等からこの制度の見直しを求めているところである。

(注) この契約は、輸出税及び事業税については特段の恩恵を与えるものではない。

(D) C A T

CERTIFICADO DE ABONO TRIBUTARIO の略称、英文でいう TAX CREDIT CERTIFICATES に相当するスペイン語である。

この制度は最近になって実施されたきわめてインセンティブに富んだ輸出奨励策で、政府（輸出促進公団）との間で所定の輸出契約を締結する輸出企業は次の恩恵を受けることができる。ただし、輸出相手国は中米共同市場（注①）以外の国、輸出産品は伝統的輸出産品（注②）以外のものという条件が付されている。

（注①）中米共同市場とは、グアテマラ、エルサルバドル、ホンデュラス、ニカラグア、コスタリカの5カ国の相互間の自由貿易の域内市場をいう。

（注②）伝統的輸出産品とはコーヒー、バナナ、砂糖、牛肉の4品目をいう。

(i) 法人税は、12年間にわたり全額（100%）免除

(ii) 資機材、原材料の輸入税の全額（100%）免除

(iii) 事業税の全額（100%）免除

及び

(iv) 輸出額（FOB価額）の15%相当額のCATの発給。このCATは有価証券の形で発給され、輸入代金の決済、法人税の支払いあるいは市場での売却等用途はまったく自由とされる。

#### (E) C I N D E

このほか、コスタリカ開発促進連盟（略称C I N D E、半官半民機関）を通じた市場調査の無償提供、融資のあっせん等が行なわれ、外貨導入のための努力がなされている。

### (3) 通貨、為替、外資制度等

#### (A) 通貨及び為替管理

##### a. 通貨

##### 1) コスタリカの通貨単位

コロン、略号¢ (Colones) 及び

センチモス (Centimos)

##### 2) 1コロン = 100センチモス

##### 3) 基準相場

① 公定レート  $¢ 20.00 = 1 \text{ US } \$$

(ただし、医薬品、医療器具等に限定される。)

② 自由レート  $¢ 50.35 = 1 \text{ US } \$$  (85年6月)

(ヤミレートは存在しない。)

##### 4) 相場決定方式

米ドルリンク制

##### b. 為替管理

1) 外貨集中義務

輸出代金のみ外貨集中義務がある。

2) 非居住者の外貨持出制限額

特になし。

c. 輸出取引制限

1) 認証制度

あり。輸出ライセンスが必要。

2) 標準決済条件

特にないが、30日～90日のユーザンスが一般的。

3) 前受金受領制限

あり。中央銀行へ集中。

4) 制度金融(輸出貨出の優遇措置)

I I F S (Institutional International Finance Source) を通じて制度金融を受けられるが、十分機能していない。

5) 輸出保険制度

なし。

(B) 外資制度

a. 外資法

コスタリカにおいては、外資を規制する特定の法令はない。また、外資のみを対象とする優遇措置はないが、輸出産業に対しては、いわゆるC.A.Tのインセンティブが受けられる(別項参照)。

b. 利潤配当

配当金の源泉課税は、居住者の場合5%、非居住者の場合15%である。

c. 不動産取得制限

非居住者に対する制限はない。

d. 駐在員事務所、支店の開設

開設自由

e. 現地法人の設立

設立自由。

ただし、株式会社、有限会社等の形態があるが、有限会社設立には資本金、役員に関しさらに厳しい制限があるため、外資会社としては一般に株式会社形態が選ばれている。

① 資本金：最低払込資本は200コロン

② 株主：設立発起人、役員、株主について、特に現地人であることは要求されないが、設立発起人は最低2名を必要とする。

③ 登記の公告：官報への掲載と商業紙（最低2紙）への掲載。

④ 設立費用：登記税が授權資本を基準に課せられる（0.3%程度）。

㉓ 所得に対する課税制度

a. 税率

1) 法人税

10%から50%までの累進課税

2) 個人所得税

5%から50%までの累進課税

3) 非居住者源泉課税

① 利子

ア. 個人または一般法人 30%

イ. 中央銀行及び同行により農業・工業の関係機関として認定された金融機関にあつては非課税

ウ. 中央銀行により認定されたその他の金融機関の場合は10%

② 配当

15%

③ ロイヤルティ

20%

4) 租税条約締結国

中米共同市場（CACM）諸国及びパナマとの相互租税条約以外は租税条約の締結なし。

5) みなし税額控除

なし。

(4) 労働事情（雇用及び賃金）

コスタリカの雇用状況をみると、80年代に入り経済活動の低迷から、建設業などを中心に失業者が増えているため、失業率が年々上昇した。（1983年9.0%）

表Ⅱ-⑦ コスタリカの失業状況

	1979	1980	1981	1982	1983
失業率(%)	4.9	5.9	8.7	8.9	9.0
(参考) 総雇用者数 (単位:千人)	699.4	724.6	726.6	740.0	739.1
その構成比(%)					
農業	30.1	28.9	27.9	29.9	29.4
製造業	15.8	16.2	16.1	15.7	15.7
建設業	7.8	7.4	6.8	5.5	5.3
商業	17.7	18.3	18.4	17.9	17.7
サービス他	28.6	29.2	30.8	31.0	31.9
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所: コスタリカ労働省

賃金については、80年代に入るとインフレの高進、景気低迷による財政支出削減等から実質賃金の伸びはマイナスとなり、これを不満とする各労働組合の反発(特に公共部門)が強まった。このため、83年政府はインフレを考慮した賃上げを行ない、民間もこれに追随したことから、83年の実質賃金上昇率はプラスとなった。今後については、経済運営が引き続きIMF主導による緊急策施行を余儀なくされていることから、賃金問題は政府にとって難しい問題となると思われる(表Ⅱ-⑧)。

表Ⅱ-⑧ コスタリカの実質賃金上昇率

年	実質賃金上昇率
1979	4.8%
1980	△2.9
1981	△9.1
1982	△19.9
1983	5.0

出所: コスタリカ労働省

### Ⅲ 世界のゴマ事情及び熱帯果実事情

#### 1. ゴマの生産、貿易の推移及び日本の輸入状況

(1) 世界のゴマの生産量は年により変動が大きく、近年は180万トンから200万トン程度で推移している。総生産量の約半分をインド、中国の2カ国で占め、これにビルマ、スーダン、メキシコを加えた上位5カ国では7割以上を占めている。このため、世界のゴマ生産量の変動はこの上位5カ国の生産次第で大きく左右されるところである。1984/85年度については、インドが前年の生産が天候に恵まれすぎた反動が出ていること、スーダンが旱魃により減産となったこと、メキシコが収穫時に雨がちな天候となり減産となったことから190万トン程度と見込まれるが、なお、中国、ビルマの見込みが流動的でありこの2カ国の天候次第では前年度並みの200万トン台になることも考えられる(表Ⅲ-①)。

(2) 世界のゴマの輸出量は生産量の12~15%程度の25万トンから30万トンで推移し、中国、スーダン、メキシコの3国で総輸出量の6割を占め、以下、グアテマラ、インド、タイ等ゴマの輸出国はきわめて少数国に限定されている。同時に、いずれも政治的(グアテマラ)、経済的(メキシコ)、自然条件的(スーダン)に多少の問題をかかえており、また、中国、インドは大生産国であるとともに大消費国でもあり、世界のゴマの貿易は必ずしも安定的とは言えない状況にある。しかしながら、1984年の総輸出量は前年をやや下回る26万トン余が確保されたと見込まれている(表Ⅲ-②)。

(3) こうした中において、日本は世界最大のゴマ輸入国であり、常に3割のシェアを占める7万トン~8万トンを輸入している(表Ⅲ-③)。1984年の輸入量は75,110トンでこのうち中国からほぼ4分の3の55,339トンが輸入され、以下グアテマラ、メキシコ、スーダン、タイの順で続いている(表Ⅲ-④)。

日本のトン当たり平均輸入価格(CIF価格)は1980年には917ドルであったが、1981年828ドル、1982年785ドル、1983年795ドル、1984年800ドルと、近年は800ドル程度で推移し、国内での大口需要家向け相場も近年トン当たり22~23万円で推移している。

表III-① 世界のゴマ生産国の生産量及び収穫面積

項目 年度 国名	生産量(1,000トン)					収穫面積(1,000ha)				
	80/81	81/82	82/83	83/84	84/85 推定	80/81	81/82	82/83	83/84	84/85 推定
(アフリカ)										
エジプト	16	17	20	21	...	16	17	20	20	...
エチオピア	38	39	38	37	35	66	64	65	63	60
スーダン	221	242	163	206	143	845	828	840	914	820
ウガンダ	20	25	35	38	...	65	70	80	83	...
(中南米)										
グアテマラ	11	18	15	16	...	14	22	18	19	...
メキシコ	176	86	46	99	65	282	150	95	160	140
コロンビア	21	13	9	8	...	38	24	18	16	...
ヴェネズエラ	57	48	53	51	50	90	75	93	108	95
(アジア・中近東)										
アフガニスタン	35	30	30	30	...	44	38	38	38	...
バングラディシュ	20	23	20	21	...	37	42	38	40	...
ビルマ	110	157	170	204	200	631	713	795	796	810
中国	259	510	342	349	330	776	818	965	789	800
インド	446	590	552	618	600	2,472	2,593	2,217	2,182	2,200
韓国	12	18	35	43	40	49	38	62	75	68
パキスタン	18	17	11	15	17	44	43	29	38	42
スリランカ	13	10	13	10	12	30	26	32	27	28
シリア	25	18	16	19	...	46	37	27	36	...
タイ	27	29	26	27	28	36	39	35	33	35
トルコ	26	25	27	38	...	45	40	44	60	...
その他	162	162	166	170	...	445	443	451	448	...
世界合計	1,713	2,077	1,787	2,020	1,880	6,071	6,120	5,962	5,946	5,861

出所：Oil World 1985年3月

表Ⅲ-② 世界のゴマ輸出国の輸出量

(単位:千トン)

国名	1980	1981	1982	1983	1984推計
(アフリカ)					
エジプト	—	—	—	3.6	1.4
エチオピア	7.4	7.5	10.0	8.2	7.6
ケニヤ	0.9	1.6	1.7	1.3	1.2
スーダン	57.3	65.2	60.8	54.0	56.0
タンザニア	3.0	4.1	3.5	3.5	4.0
ブルキナファソ	3.9	2.8	3.5	3.4	3.0
(中南米)					
エルサルバドル	5.5	6.6	1.0	1.2	4.6
グアテマラ	10.9	21.0	12.1	10.2	13.2
ホンジュラス	3.6	2.2	0.7	0.9	1.0
メキシコ	52.3	49.1	28.4	24.9	33.0
ニカラグア	5.5	6.5	5.2	4.6	4.3
(アジア)					
中国	18.2	23.5	41.2	98.0	69.5
香港	1.5	7.7	9.5	19.3	8.3
インド	2.4	2.3	12.0	13.0	16.2
インドネシア	2.5	3.3	1.1	2.9	2.3
シンガポール	4.4	3.4	3.4	4.0	3.7
スリランカ	11.9	12.0	15.0	5.5	7.0
タイ	10.0	15.8	14.1	7.2	11.3
ヴェトナム	0.1	4.7	6.7	6.5	5.2
その他	28.1	20.5	17.4	13.4	12.5
世界計	229.4	259.8	247.3	285.6	265.3

出所: Oil World 1983年3月

表Ⅲ-③ 世界のゴマ輸入国の輸入量

(単位:千トン)

国名	1980	1981	1982	1983	1984 推計
(ソ連・西欧)					
ギリシア	6.8	2.2	7.2	7.2	5.5
イタリア	8.8	1.7	3.3	4.3	5.1
西独	3.8	4.0	3.9	5.5	5.6
ソ連	11.3	8.9	12.6	5.3	8.8
(アフリカ)					
エジプト	7.0	15.8	0.8	11.0	8.6
チュニジア	2.9	2.0	3.8	3.5	4.0
(米州)					
米国	31.6	38.0	33.2	42.8	36.8
(アジア・中近東)					
香港	2.9	10.2	11.5	20.2	9.1
イラン	3.1	4.2	6.4	6.2	6.2
イスラエル	8.2	9.3	7.7	7.4	7.8
日本	62.8	58.8	69.2	82.0	75.1
ヨルダン	3.3	5.3	6.9	5.3	5.9
韓国	13.1	14.3	6.5	10.7	8.1
レバノン	4.0	4.2	3.2	1.6	4.1
	3.0	2.4	2.5	2.8	3.9
サウジアラビア	6.7	10.4	10.6	9.4	11.0
シンガポール	5.8	4.4	6.5	6.6	8.3
シリア	7.0	2.5	10.1	6.0	6.4
台湾	11.3	12.5	13.7	12.0	13.4
イエメン共和国	8.2	6.4	7.0	7.0	7.2
イエメン民主共和国	10.4	3.9	3.9	4.2	5.6
その他	20.1	17.8	28.9	21.1	18.8
世界計	242.1	239.2	259.4	282.1	265.3

出所: Oil World 1985年3月

表Ⅲ-④ 日本のゴマ輸入量の推移

(単位:トン)

年月	合計	単価 (1kg・円)	中国	スーダン	コロンビア	タイ	グアテマラ	スリランカ	ニカラグア	メキシコ
55年	62,752	211	16,666	5,316	11,443	3,947	3,227	1,256	661	17,124
56	58,784	184	15,396	6,435	9,158	4,516	7,035	1,672	930	4,671
57	69,154	196	28,076	16,220	7,209	4,369	4,168	3,200	1,178	899
58	81,958	189	63,333	7,151	100	792	1,727	1,373	697	49
59	75,110	189	55,339	2,044	-	1,778	4,448	54	936	2,332
58. 10	5,591	189	4,466	98	-	101	-	29	59	-
11	7,969	189	7,156	194	-	16	-	-	-	-
12	6,574	192	5,290	-	-	29	-	-	29	32
59. 1	5,659	191	4,429	-	-	49	172	-	9	307
2	6,382	196	5,135	-	-	31	438	-	5	190
3	5,556	190	4,261	-	-	37	463	24	57	397
4	9,350	183	6,948	196	-	29	756	30	132	519
5	6,710	187	3,741	682	-	64	258	-	126	730
6	6,600	189	3,932	392	-	58	906	-	118	-
7	8,227	188	5,849	583	-	155	1,066	-	-	30
8	5,303	192	3,000	193	-	336	156	-	72	49
9	5,668	186	4,796	-	-	455	201	-	-	-
10	4,540	191	3,857	-	-	320	-	-	31	110
11	5,497	186	4,782	-	-	195	32	-	39	-
12	5,618	189	4,609	-	-	49	-	-	347	-
60. 1	5,854	191	4,371	-	100	88	247	-	119	205
2	5,384	195	3,981	145	-	148	-	-	558	190
3	8,048	194	5,188	-	-	99	597	-	343	-
4	8,471	190	6,603	-	-	37	457	-	69	198
5	6,363	178	4,904	-	-	-	-	-	24	-
6	5,476	186	4,671	-	-	17	-	-	54	-

出所: 通関統計

## 2. 主要熱帯果実の生産及び日本の輸入の状況

### a バナナ

熱帯果実の代表であるバナナはアジア、中南米、アフリカ諸国で広く生産され、また、常食として消費されている。輸出を目的とした商品生産が盛んな国は、コスタリカ（1983年の生産量102.1万トンに対し輸出量100.9万トンと殆んどが輸出に仕向けられた。）、コロンビア（生産量128.0万トンに対し輸出量78.6万トン）、エクアドル（生産量200.0万トン、輸出量91.0万トン）、ホンジュラス（生産量125.0万トン、輸出量71.4万トン）、パナマ（生産量110.0万トン、輸出量65.2万トン）、グアテマラ（生産量67.5万トン、輸出量31.6万トン）といった中南米諸国と、フィリピン（生産量420.0万トン、輸出量61.2万トン）が挙げられる。

日本の輸入量は1984年68.2万トンで、そのうちフィリピンからの輸入が85%の58.0万トン、残りは台湾からの輸入である。

### b バイナップル等

世界全体の生産量は、パイナップルが約870万トン、パパイヤ約200万トン、マンゴ約1,400万トン、アボガド約160万トンである。日本の輸入量は、1984年でパイナップル約115,000トン（ほとんどがフィリピンから）、パパイヤ約3,500.0トン（アメリカ等）、マンゴー約2,250トン（フィリピン、メキシコ）、アボガド約2,460トン（アメリカ）となっている。その他、ドリアン、レイン等も少量だが輸入されている(表Ⅲ-⑤、⑥)。

表Ⅲ-⑤ 世界の熱帯果実の生産状況

① バナナ

(単位:千トン)

国名	1978	1979	1980	1981	1982	1983
ブルンディ	950	961	950	960	960	970
タンザニア	733	750	780	820	810	820
コスタリカ	1,149	1,078	1,092	1,144	1,136	1,021
グアテマラ	550	556	650	650	655	675
ホンジュラス	1,267	1,300	1,330	1,425	1,240	1,250
メキシコ	1,348	1,553	1,501	1,591	1,572	1,624
パナマ	1,056	1,000	1,050	1,045	1,057	1,100
ブラジル	6,240	6,133	6,721	6,710	6,821	6,692
コロンビア	1,100	1,040	1,030	1,155	1,274	1,280
エクアドル	2,152	2,032	2,269	2,010	1,999	2,000
ベネズエラ	900	961	890	915	921	944
バングラディッシュ	596	616	652	684	678	678
インド	4,546	4,274	4,830	4,580	4,195	4,500
インドネシア	1,378	1,622	1,977	2,501	1,800	1,810
フィリピン	2,886	4,162	3,977	4,073	4,077	4,200
タイ	2,000	2,007	2,014	2,021	2,028	2,035
ベトナム	520	772	895	900	1,000	1,100
パプアニューギニア	880	900	916	932	949	964
世界計	37,134	38,235	40,051	40,776	40,006	40,700

出所: FAO 「PRODUCTION YEARBOOK」

(付) バナナの輸出国及び輸入国

(輸 出)

(単位:千トン)

国 名	1978	1979	1980	1981	1982	1983
アイボリーコースト	144	116	122	111	92	73
コスタリカ	1,007	1,007	999	1,026	1,010	1,009
ガーデローブ	157	108	61	90	119	114
ガテマラ	326	299	391	400	404	316
ホンジュラス	760	897	987	804	914	714
マルチニーク	189	139	54	75	95	156
ニカラグア	123	119	121	94	147	69
パナマ	628	565	505	573	566	652
アメリカ	201	197	205	217	210	188
ブラジル	133	128	67	67	59	92
コロンビア	622	626	692	803	804	786
エクアドル	1,224	1,386	1,291	1,230	1,261	910
中 国	92	109	101	95	99	121
フィリピン	777	860	924	866	927	612
世 界 計	6,980	7,097	6,956	6,911	7,149	6,227

出所: FAO 「TRADE YEARBOOK」

(輸 入)

(単位:千トン)

国 名	1978	1979	1980	1981	1982	1983
カナダ	236	249	246	260	269	250
アメリカ	2,306	2,410	2,423	2,534	2,665	2,458
アルゼンチン	112	176	195	181	101	73
日 本	804	790	726	708	758	576
フランス	498	440	446	462	463	441
東ドイツ	120	104	80	82	42	36
西ドイツ	617	603	534	523	506	459
イタリア	317	348	279	249	324	321
オランダ	132	126	114	109	98	93
イギリス	315	305	323	328	328	307
ユーゴスラビア	130	123	78	59	11	4
世 界 計	6,902	7,097	6,816	6,784	6,766	6,066

出所: 同上

② バインアップル

(単位：千トン)

国名	1978	1979	1980	1981	1982	1983
コソゴ	100	102	102	103	104	105
コートジボワール	312	315	330	350	280	350
ケニア	130	140	145	150	155	160
東アフリカ	186	203	222	243	245	237
ザイール	147	152	153	153	153	153
メキシコ	568	550	551	463	444	400
アメリカ	612	618	596	577	608	549
ブラジル	575	580	566	619	669	841
エクアドル	125	125	135	140	137	140
バングラディッシュ	140	142	153	156	161	160
中国	873	322	304	264	285	295
インド	112	500	549	593	643	660
インドネシア	151	259	181	132	210	230
マレーシア	187	193	176	155	160	160
フィリピン	465	605	901	1,293	1,242	1,300
タイ	1,400	1,372	1,372	1,673	1,824	1,439
世界計	7,125	7,504	7,843	8,488	8,768	8,665

出所：FAO「PRODUCTION YEARBOOK」

③ バパイヤ

(単位：千トン)

国名	1978	1979	1980	1981	1982	1983
ザイール	164	159	155	156	156	156
キューバ	53	23	38	32	35	38
メキシコ	285	326	221	226	201	230
ブラジル	366	355	427	450	460	460
コロンビア	58	65	65	27	30	31
ベルギー	66	43	45	47	48	49
インド	250	250	265	270	270	270
インドネシア	220	264	315	312	300	310
フィリピン	86	85	52	104	105	110
世界計	1,839	1,858	1,862	1,957	1,930	1,982

出所：FAO「PRODUCTION YEARBOOK」

## ④ マンゴー

(単位:千トン)

国名	1978	1979	1980	1981	1982	1983
マダガスカル	142	172	173	158	160	160
タンザニア	168	172	175	178	180	182
ザイール	155	146	137	137	137	137
ドミニカ	168	174	176	180	182	184
ハイチ	310	318	326	330	335	340
メキシコ	541	566	581	561	701	665
ブラジル	670	549	530	600	600	610
ベネズエラ	108	119	101	104	105	111
中国	211	257	276	341	338	353
インド	9,000	8,217	8,363	8,516	8,663	8,700
インドネシア	418	333	345	444	340	344
パキスタン	561	538	550	547	652	683
フィリピン	335	359	374	367	597	550
世界計	13,751	12,917	13,091	13,454	13,913	13,954

出所: FAO 「PRODUCTION YEARBOOK」

## ⑤ アボガド

(単位:千トン)

国名	1978	1979	1980	1981	1982	1983
ドミニカ	135	139	125	134	135	136
ハイチ	55	57	58	59	60	61
メキシコ	395	459	424	453	455	448
アメリカ	133	93	244	166	214	218
ブラジル	103	132	107	110	120	125
ベルー	68	60	63	64	66	67
インドネシア	47	39	46	111	60	65
世界計	1,314	1,394	1,489	1,489	1,549	1,586

出所: FAO 「PRODUCTION YEARBOOK」

表Ⅲ-⑥ 日本の熱帯果実の輸入状況

① パナナ

(単位:数量トン,金額百万円,単価円/Kg)

	55年			56年			57年			58年			59年		
	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価
合計	726,086	43,439	60	707,904	49,254	70	757,917	59,958	79	575,895	54,919	95	682,355	60,817	89
中国	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	92	-	-	-
台湾	82,556	7,390	90	58,000	6,103	105	74,379	10,621	143	96,855	10,289	106	99,094	10,000	101
マレーシア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	3	418	-	-	-
フィリピン	642,096	35,962	56	644,330	42,744	66	681,375	49,160	72	469,002	43,722	93	580,439	50,600	87
インドネシア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4,299	434	101	-	-	-
エクアドル	1,425	87	61	5,124	374	73	2,163	177	82	5,730	471	82	2,823	217	77

: 通関統計(以下同じ)

② バインアップル

(単位:数量トン,金額百万円,単価円/Kg)

	55年			56年			57年			58年			59年		
	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価
合計	105,013	9,153	87	122,829	10,391	85	121,877	10,356	85	101,987	9,190	90	114,791	8,763	76
台湾	4,061	327	81	907	71	78	597	46	77	401	41	103	316	32	101
タイ	-	-	-	21	4	173	0	0	77	14	2	126	-	-	-
フィリピン	100,930	8,817	87	121,891	10,312	85	121,260	10,298	85	101,544	9,137	90	114,443	8,720	76
アメリカ	22	9	418	10	4	440	20	11	554	29	10	333	32	11	341

③ ババイヤ

単位(トン, 千円, 円/Kg)

	56年			57年			58年			59年		
	数量	金額	単価									
合計	3,267	1,649	505	2,983	1,817	609	2,757	1,703	618	3,490	1,948	558
フィジー	-	-	-	3	2	619	0	0	544	10	8	737
クック諸島	-	-	-	-	-	-	3	2	687	3	2	581
アメリカリカ	3,267	1,649	505	2,979	1,814	609	2,754	1,701	617	3,475	1,937	557
ニュージージーランド	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	625

(備考) アメリカからの輸入は全量ハワイからの輸入である。

④ マンゴ

単位(トン, 百万円, 円/Kg)

	55年			56年			57年			58年			59年		
	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価
合計	1,216	718	590	1,573	877	558	1,362	890	654	1,797	1,032	574	2,251	1,331	591
台湾	24	15	638	42	29	687	1	1	629	-	-	-	1	0	646
フィリピン	524	292	557	883	427	483	806	485	602	1,138	632	555	1,657	963	581
(香港)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	564
メキシコ	662	407	615	647	421	651	554	404	729	632	374	592	563	346	614
キューバ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	8	1,445	7	4	636
フィジー	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1,265	1	1	1,149
その他	6	4	599	1	1	684	1	1	997	21	21	824	20	15	764

⑤ アボガド

単位(トン、百万円、円/Kg)

	55年			56年			57年			58年			59年		
	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価	数量	金額	単価
合計	479	342	714	976	405	415	784	477	608	1,777	782	440	2,460	886	360
アメリカ	337	250	744	833	304	365	527	280	531	1,617	681	422	2,247	801	356
メキシコ	142	92	645	143	101	711	257	197	766	160	101	627	213	85	398

⑥ その他

(単位:トン)

	輸 入 量				備 考
	1983		1984		
	1982	1983	1984	1984	
ドリア	23	23	19		タイ, フィリピン
トガバ	-	0.3	0.0		フィジー, メキシコ
レイ	392	734	899		台湾
チエリ	0.1	7	18		アメリカ
ラバ	-	0.1	-		タイ
オホミ	-	1	-		メキシコ
シン	-	0.1	-		メキシコ
サボ	-	0.1	0.0		メキシコ
ゾウ	-	-	1		ミクロネシア
サボ	1	0.5	2		メキシコ
パッション	7	8	9		NZ
アエ	3	10	11		NZ
ベ	0.0	1	8		NZ
ス	42	10	50		NZ, メキシコ
タマ	4	5	6		NZ
バ	-	3	4		NZ

出所: (社) 日本青果物輸入安全推進協会調べ

## Ⅳ 農作物生産の現状とゴマ栽培開発の検討

### 1. 栽培環境

コスタリカ共和国は、北緯10度を中心に8度から11度に及ぶ太平洋とカリブ海（大西洋）に挟まれた細長い国である。国の中央部には、グアナカステ、中央およびタラマンカの標高3,000m級の三つの山脈が走っている。

このため、国土は(51,260Km<sup>2</sup>)3地域に大別され、それぞれ、①太平洋岸地帯(25,500Km<sup>2</sup>, 50%), ②中央高原地帯(10,360Km<sup>2</sup>, 20%)そして③カリブ海(大西洋)岸地帯(15,400Km<sup>2</sup>, 30%)となっている。これらのうち、農耕地は太平洋側の北部のグアナカステ地区と南部のプンタレナス地区のゴルフート地方、そしてカリブ海側の平坦地212Km<sup>2</sup>に多く見られる。一方、中央高地帯の比較的標高の高い所でも、低緯度のため気温の垂直分布が上がり、段々畑式の農耕地と牧場が展開するのが特徴だ。

世界に栽培分布する農作物の種類や品種はその生育・成熟の環境適応によって、ふつう所屬する植生地理が決まる。つまりいずれの植生に属するかは、栽培上の気候条件が主因となる。この農業気候を大きく左右しているのが気温と雨量である。そこで、まずコスタリカにおける気象上の植物生態分布から、中米5カ国との比較を示すと表Ⅳ-①の通りである。

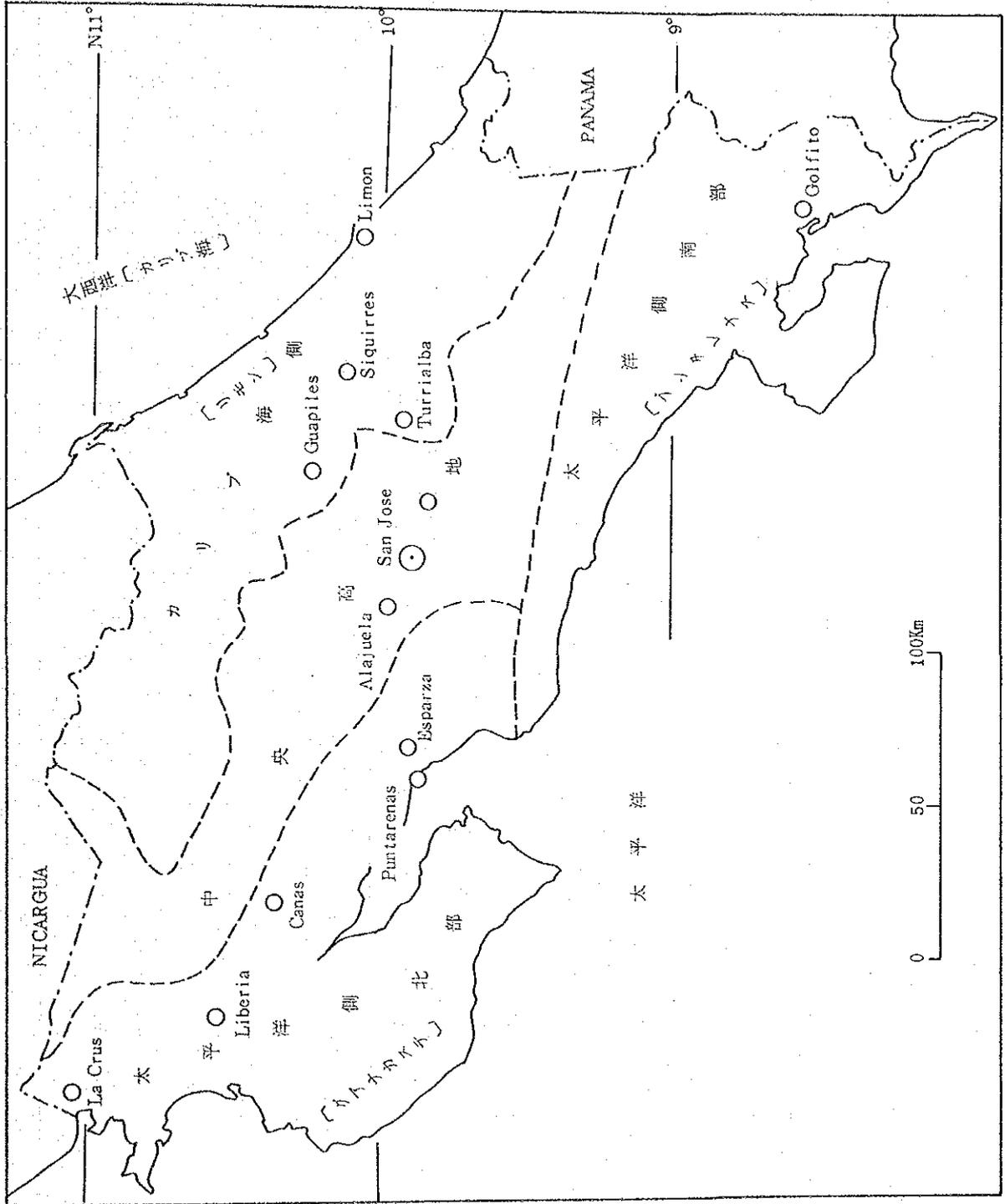
表Ⅳ-① 中米5カ国の国土面積と緯度気候区分の分布

区 分	中米全体	ホンジュラス	ニカラグア	グアテマラ	コスタリカ	エル・サルバドル
熱帯地域	229,755	50,315	68,999	62,000	36,370	12,071
亜熱帯地域	141,041	58,374	40,428	26,000	9,810	6,429
温帯地域	32,346	5,415	609	21,000	5,080	242
計	403,142	114,104	110,036	109,000	51,260	18,742

出所：SIECA, Consideraciones Sobre la Comentacion agroecologicaentre los paises Centroamericanos, 1975

このように、コスタリカは熱帯地域や亜熱帯地域でその大半を占めるが、一方、標高の高い地帯には温帯～温冷帯地域のあるのも大きな特徴である。これは前述のように、地形・標高の著しい変化の国土だけに、これはふつう4～5地帯に分類される。ここでは四つの区分、すなわち、①太平洋側北部、②太平洋側南部、③中央高地そして、④カリブ海側が適当な分類と考えた(図Ⅳ-①, 表Ⅳ-②)。

図 IV-① コスタリカ 農業気候区分の概略



表Ⅳ-② 主要地点における気温（上段）と降雨量の比較

地名	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
太平洋側北部 ( <small>メナカステ</small> )	27.0 (°C)	27.0	27.4	28.6	28.3	27.2	27.1	27.0	27.1	26.5	26.7	27.0	27.2
	5.1 (mm)	1.4	4.2	22.5	187.0	187.0	173.1	171.0	349.6	322.4	127.7	21.6	1,635.2
Caracas (50m)	24.5 (°C)	24.0	24.7	24.8	25.0	25.5	25.7	26.0	26.0	25.7	26.0	25.7	25.3
	20.0 (mm)	30.0	20.0	50.0	210.0	280.0	180.0	200.0	320.0	360.0	100.0	20.0	1,790.0
カリブ海側 (リモン)	24.5 (°C)	24.7	25.3	25.7	26.1	26.0	25.4	25.7	26.0	25.9	25.2	24.8	25.4
	275.6 (mm)	170.1	175.6	236.5	272.5	250.7	372.8	276.3	116.5	142.5	377.7	407.7	3,124.6
Guapiles (100m)	23.6 (°C)	23.3	24.1	24.7	25.3	25.3	24.9	25.2	25.3	25.0	24.4	23.7	24.6
	300.1 (mm)	215.5	207.4	247.6	413.5	434.5	493.6	403.5	344.9	436.6	495.6	516.0	4,508.8
Turrialba (800m)	21.0 (°C)	21.2	22.1	22.3	22.7	23.1	23.0	23.1	23.1	23.1	22.5	21.3	22.3
	160.0 (mm)	140.0	70.0	120.0	210.0	290.0	270.0	210.0	220.0	250.0	270.0	310.0	2,520.0
中央高地	22.4 (°C)	23.0	23.4	23.6	22.3	20.5	22.0	18.2	21.2	21.1	21.5	22.1	22.2
	9.1 (mm)	15.0	15.7	58.7	279.5	261.8	224.0	231.1	328.5	358.7	143.1	38.5	1,964.2
San Jose (1,150m)	19.3 (°C)	19.6	20.0	20.6	21.1	20.9	20.7	20.2	20.1	20.1	20.0	19.8	20.2
	15.0 (mm)	9.0	15.0	44.0	227.0	291.0	220.0	247.0	332.0	338.0	153.0	43.0	1,934.0
太平洋側南部 ( <small>サンタレナ</small> )	27.9 (°C)	27.9	28.1	27.9	27.7	27.3	27.1	27.1	27.5	27.2	27.1	27.4	27.5
	154.9 (mm)	140.8	187.8	278.8	474.2	429.2	470.3	514.7	552.2	692.2	576.7	305.5	4,782.2

出所: Algunos Aspectos Basicos Agrologicos de Costa Rica 1980

## 2. 新大陸起源の農作物

コスタリカにおける主要農作物の栽培事情を知るためには、まず基礎知識として新大陸起源の農作物について知っておく必要がある。

世界の農耕文化には、①アフリカサバンナ農耕文化（ソルガムを主とした雑穀類、ウリ類、ササゲ・ゴマなど）、②地中海農耕文化（ムギ類、エンドウ・ソラマメ・アブラナ属など）、③根栽農耕文化（ヤマイモ・タロイモ・バナナ・ココヤシ・サトウキビなど）、そしてこれから述べる④新大陸農耕文化である。なお、照葉樹林文化は、根栽農耕文化の北方変型といわれサトイモ・ナガイモ・コンニャク・アワ・キビ・オカボ・エゴマなどから最後の段階でイネ水田栽培に移行（稲作文化）した。

新大陸農耕文化の生れた地域は、ほとんどが中央アメリカと南アメリカで、しかも比較的人類の生活し易い高地帯（温・暖帯）である。この農耕文化で生れた代表的作物は、表Ⅳ-③に掲げたように、トウモロコシを筆頭に、重要なものとして、サツマイモ、ジャガイモ、インゲ

表Ⅳ-③ 中央・南アメリカ起源または馴化された作物

作物	中央アメリカ	南アメリカ	備考
穀類	トウモロコシ(メキシコ?)	トウモロコシ(ボリビア?, ペルー?)	発祥地は論争中
豆類	インゲンマメ(メキシコ・グアテマラ・ホンジュラス), ベニバナインゲンマメ, ナタマメ, リスマメ(ライマメ)	ビーナッツ(ボリビア)インゲンマメ, リスマメ	ベニバナインゲンマメは赤花でインゲンマメより粒大で寒冷地適応種
根栽類	サツマイモ(メキシコ)	キャッサバ(ベネズエラ)ジャガイモ(ペルー)	サツマイモは野生アサガオが原種
油料類	ヒマワリ(メキシコ)	ワタ(棉実・ペルー)	ワタにはアフリカ起源説あり
繊維類	リウゼツラン(メキシコ)ヘネケン(メキシコ)	ワタ(ペルー)	リウゼツランはテキューラ酒原料
果樹・ナッツ類	サボテラ(チューインガムの木)パイナップル, パパイア, バンレイシ, アボガド, カカオ, ホコテ		
野菜・香辛料類	カボチャ(メキシコ?)ハヤトウリトマト(メキシコ)トウガラシ(メキシコ)	トウガラシ(ペルー・ボリビア)	
喫煙類		タバコ(ボリビア・アルゼンチン国境)	

ンマメ、ビーナッツ、カボチャ、トマト、タバコなどが並ぶ。これらは、いずれも中央アメリカや南アメリカの高地帯の気候と土壌の生育条件によく適応した作物なのである。これらの作物の

うち、トウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモ、トマト、タバコなどは、コロンブスの大陸発見後、つづいて1521年、スペインのコルテスがメキシコのユカタン半島から上陸し、マヤ文明を滅したあと、間もなくヨーロッパはじめ全世界に広まったものである。それで、これらの作物の多くは、温・暖帯起源作物で、決して熱帯起源でないことに注目したい。

中央・南アメリカ起源作物は海外に伝播して大いに利用された反面、新たに伝来・導入された作物も多い。たとえば、インド起源で中国で改良された大豆は、北米大陸を中心に中央・南アメリカへ、アフリカ・サバンナ起源のソルガム(ソルゴ)は、むしろ積極的に中央・南アメリカへ導入された。さらに、根栽農耕文化生れの南アジア・オオセニア起源のバナナとサトウキビが広がり、エチオピア起源でトルコなどアラビアで改良されたコーヒーが最も新しく、これは1770年にはじめてブラジルに導入され、その後急速に中央アメリカへ伝播した。最近では、陸稲・水稲としてのイネ栽培がかなり普及し、生産過剰になっているという。

以上のように、原産の作物のほかにも新たに導入され、馴化適応した作物も多いので、多彩な農作物と農業形態を示している。

### 3. 主要作物の栽培事情

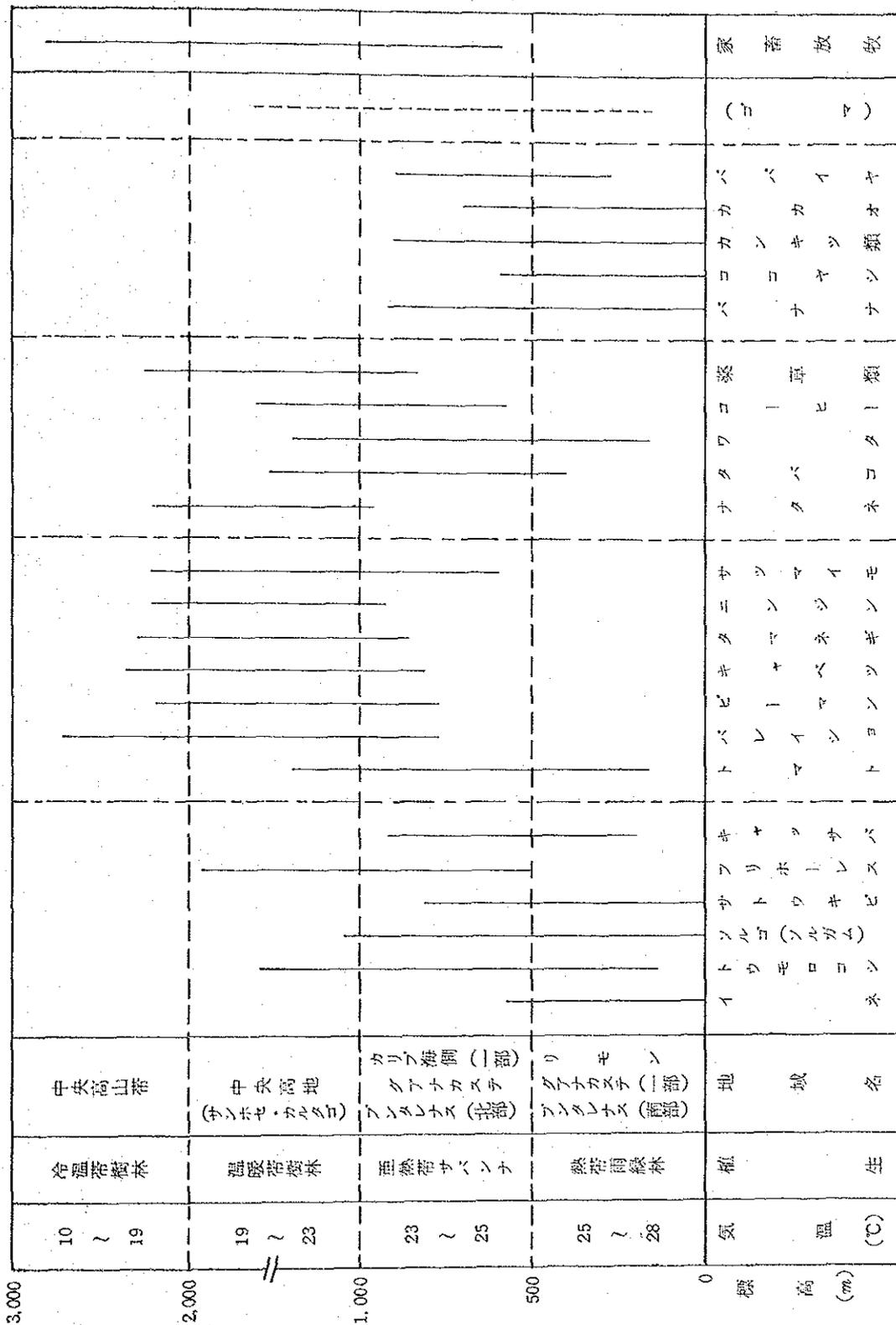
コスタリカの農作物栽培事情を明確に知るためには、この国のおかれた地理的環境、すなわち、緯度・地形・標高などから、どうしても水平分布よりもむしろ垂直分布による農作物栽培の詳細な調査を行う必要がある。この垂直分布を示すということは、栽培環境の階層状に異なることを意味するもので、それだけ水平の緯度的分布に更に加わることになる(熱帯域から冷温帯域まで)ので、農作物の種類が豊富に分布する結果をもたらす。また図Ⅳ-②には、それに基づく標高の温度差による垂直分布を示した。

この垂直分布図からわかるように、コスタリカは北緯10度を中心としてその前後に位置するため、標高の低い500m前後までは、イネ(水稲)、ソルゴ、バナナ、ココヤシ、キャッサバなど元来熱帯性要求の作物で占められている。これに対し、亜熱帯から温帯にかけの標高1,000m前後では、トウモロコシ、サトウキビ、フリフォーレス、カンキツなど果樹類をはじめ、大半の農作物が入るようになる。さらに中央高地に見られるような高原野菜の多くは、カルタゴ市から火山火口へかけての1,000m以上の冷温帯で栽培されているのが特徴である。

つぎに、農業気候区分による作物栽培状況について述べてみるが、これに関連する統計上の事項は、表Ⅳ④~⑨に示した。これらの表からわかるように、コスタリカの農業生産物はコーヒーとバナナで代表される企業的な商品作物によるモノカルチャー方式の比重も大きい。

今回の農業調査で、コスタリカ全土を廻ることはできなかったが、今までの報告書や文献なども参照すると、おおよそ次に述べる現状である。

図Ⅳ-② コスタリカ国の標高の温度差による農作物の垂直分布



表Ⅳ-④ 主要農産物の栽培面積(1000 ha)

作物名	1980 - 81	1981 - 82	1982 - 83	1983 - 84 ⑧
A 基礎穀物				
1. イネ	84.6	72.3	77.0	88.4
2. トウモロコシ	46.9	49.1	56.3	62.1
3. フリフォーレス (マメ類)	23.7	35.5	38.5	41.6
4. ソルゴ(ソルガム)	20.7	17.2	15.8	20.0
B 輸出作物				
1. コーヒー	82.5	87.5	83.2	87.0
2. バナナ	26.7	27.4	24.8	24.8
3. サトウキビ	32.2	32.0	33.4	34.0
4. カカオ	25.0	n. d.	25.0 a/	n. d.
C せんい作物				
1. ワタ	2.2	0.8	1.0	1.5
D 嗜好作物				
1. タバコ	1.2	1.2	1.1	1.5
E その他				
1. ダイズ	0.8	n. d.	2.0	1.7
2. ジャガイモ	2.7	2.8	2.2	n. d.
3. タマネギ	0.4	0.4	0.4	0.4

⑧ 推定量

出所: INFORMACION BASICA DEL SECTOR AGROPECUARIO Y  
DE RECURSOS NATURALES RENOVABLES DE COSTA  
RICA Numero 3 1985

⑨ コスタリカ中央銀行の発表値とは一致しない。

表Ⅳ-⑤ 主要農産物の生産量(1000トン)

作物名	1980-81	1981-82	1982-83	1983-84 <sup>②</sup>
A 農産物				
1. 基礎穀物				
a. イネ	243.6	202.0	148.3	281.4
b. トウモロコシ	88.0	82.9	81.1	105.4
c. フリフォールレス	12.3	16.3	14.4	120.8
d. ソルゴ	41.7	30.0	27.7	39.1
2. 輸出作物				
a. コーヒー(生果)	661.5	565.0	682.9	612.5
b. バナナ	931.4	919.0	946.9	888.0
c. サトウキビ	2,203.6	2,128.7	2,226.3	2,335.7
d. カカオ	5.3	5.0	3.5	2.0
3. 繊維作物				
a. ワタ	0.8	0.6	0.6	1.2
4. 根莖作物				
a. ジャガイモ	19.2	22.0	34.6	n. d.
b. キヤッサバ	19.0	17.1	27.7	n. d.
5. 嗜好作物				
a. タバコ	1.6	1.7	1.3	2.0
6. 料理用バナナ	90.0	89.8	89.9	89.0
7. タマネギ	2.9	3.7	3.7	3.7
B. 畜産物				
1. 牛肉	71.8	85.9	65.0	60.3
2. 豚肉	11.4	12.2	10.4	11.7
3. 鶏肉	15.3	13.3	18.0	19.0
4. 牛乳(1000ℓ)	307.7	302.2	330.0	360.0
5. 卵(1000個)	232.1	221.1	237.0	250.0
C. 魚類	15.5	13.9	13.8	15.1
D. 材木(マイル)	428.5	551.6	500.0	469.0

② 推定量

出所: INFORMACION BASICA DEL SECTOR AGROPECUARIO Y DE  
RECURSOS NATURALES RENOVABLES DE COSTA RICA  
Numero 3 1985.

①) コスタリカ中央銀行の発表値とは一致しない。

表Ⅳ-⑥ 主要農産物のヘクタール当りの生産量

作物名	1980-81	1981-82	1982-83	1983-84 ㊟
A. 基礎穀物				
1. イネ(モミつき)	2.9	2.8	1.9	3.2
2. トウモロコシ	1.9	1.7	1.4	1.7
3. フリフォーレス	0.5	0.5	0.4	0.5
4. ソルゴ	2.0	1.7	1.8	2.0
B. 輸出作物				
1. コーヒー(生果)	8.0	7.0	8.4	7.9
2. バナナ	34.8	33.5	38.2	35.7
3. サトウキビ	66.0	66.0	73.0	73.0
C. ワタ	0.3	0.8	0.6	0.8
D. タバコ	1.4	1.4	1.2	1.3

㊟ 推定量

出所: 前同

㊟ コスタリカ中央銀行の発表値とは一致しない。

表Ⅳ-⑦ 1983年度農産物の期待生産量

作物名	生産量(トン/ha)
A. イネ(機械化栽培)	
1. 中央高地域	3.312
2. カリブ海地域	2.760
3. グアナカステ地域	4.195
4. 太平洋南部域	3.312
B. ソルゴ(雨期作)	
1. 中央高地域	2.576
2. グアナカステ地域	2.576
C. トウモロコシ(機械化栽培)	2.245
D. フリフォーレス	0.782
E. フリフォーレス(半機械化栽培)	0.966
F. ダイズ	1.610
G. ワタ	0.658
H. タバコ	1.700
I. ビーナッツ(機械化栽培)	1.610
J. ジャガイモ(カルタゴ地方)	24.840
K. タマネギ( )	
1. 乾期(12月~4月)	25.300
2. 雨期(5月~11月)	26.300
L. キャベジ	23.500
M. キャッサバ	15.000
N. ビーマン	11.000
O. トマト	28.500

出所: 前同

㊟ コスタリカ中央銀行発表値とは一致しない。



表Ⅳ-⑨ 作物の主要品種と交配種(1983)

作物名	主要品種名と交配種名
A. コーヒー	Caturra, Mundo Novo, Catual Rojo, Typica, Hibrido Tico, H-33, Villalobos, villa Sarchi, Geisha T-2722
B. サトウキビ	NGO 376, NGO310, H-44-3098, H57-5174, B50-377, 2-68, B60-267
C. ワタ	Stoneville 213, Parsons 21, Deltapine 55, Des-24, Morada
D. イネ	OR 1113, CR 5272-M, CR201
E. フリフォーレス	Porrillo Sint, Talamanca, México 80, Ica Pijao, Alajuela 1, R-79 Brunca, Huetar, Chorotega, Zamorano
F. トウモロコシ	Tico V-1, Tico V-5, Tico V-7, Diamantes 8043, Poza Rica 7843, Tico V-2, Tico V-6, Tocumen 7428, H-3 Salvadoreño, H-5 Salvadoreño, B-666, X-105-A, X-5065-A, X-304-A, X-107-A
G. ソルゴ	Ica Nataima, R-1019, R-1090, Dorado-M, C-42-A, E-57, F-59, Br-64, NK 222, E-57, E-59, Br-64, NJ-222, Savanna 5, NK-180, NK-266, R-8417, YE-90, YE-90-E, G-522, D-55, D-42-A, B-815, P-8225, P-8224, Topaz, P-8416, DR
H. ジャガイモ	Atzimba, Serrana, Molinera, Rosita, Tollocan
I. ダイズ	Jupiter, Siatsa, 194-A
J. カカオ	Catongo × Pound 7, Catongo × Pound 12, EET, 40 × SCA12, 外
K. タバコ	Sol: Speight 6-28, "Hibrido Estuta", Cooker 258, Criollas, Vena Blanca Yloo Hojas Estufodo: Speight 6-28, NC-95, NC-89, "Hibrido de estufa" Burley: KY-14, KY-17, Hibridos KY-14×L8y KY-12×L8 Habano: Tulin 82, Marrón
L. バナナ	Grand Naine, Cavendish Gigante, Valery
M. ココヤシ	Atlantic tall, Pociictoll, Enano verde, Enano Dorado de la Malasia, Hibrido
N. カンキツ類	オレンジ: Hamlim, Parson Brown, Pineapple, V-Iencia, Whashington Novel, Ruby レモン: Eureka, Mejicana ライム: Mesina, Mejicana
O. その他1.ショウガ	Cerflor, TS450
2.イチヂク	H-78, H-86
3.ゴマ	Inomar(注:これは1945年,ベネズエラ51×45-1138の交配種の後代から選抜した3BA型の白ゴマ)
4.ピーナツ	Floruner

出所: 前同